池田市埋蔵文化財発掘調査概報

1988年度

1989年3月

池田市教育委員会

池田市埋蔵文化財発掘調査概報

1988年度

池田城跡発掘調査

宮の前遺跡発掘調査

豊島南遺跡発掘調査

1989年3月

池田市教育委員会

序　　文

池田市に市制が施行されて今年で50年を迎えることとなりました。この間、市街地は都市化に伴い鉄筋コンクリートの建物が建ち並び、また、道路、上下水道、公園が整備され、住みよい町として発展を続けてまいりました。

しかし、こうした生活環境の改善とは裏腹に、私達の祖先が伝えてきた自然や文化財が破壊、散逸し、市内のかつての面影をしのぶことができないほど様がわりしてしまったのも事実であります。

私達が目指すゆとりある住みよい町は、ただ物質的な生活環境の充実だけでなく、自然の愛護、郷土の歴史、文化財への理解といった精神的な面の充実が必要不可欠であります。このため、これ以上の自然や文化財の破壊、散逸はくい止めなければなりません。

特に、文化財は今日の発展を築きあげた先人の軌跡であり、一度破壊されると二度と復元することができないものであります。また、現代に生きる者だけの占有物などでは決してありません。私達はこのことを十分に認識し、保護と継承に努めなければなりません。

この報告書は、上述した状況の中で危機に直面している遺跡について、国、大阪府の補助を受けて実施した発掘調査の概要報告であります。調査の実施にあたっては多くの御指導、御助言をいただいた諸先生並びに関係機関をはじめ、土地所有者、近隣住民の方々には文化財保護に対して格別の御理解と御協力をいただきました。心より感謝と敬意を表し、厚くお礼申し上げます。

平成元年３月

池田市教育委員会
教育長　片山久男

例　　言

1．本書は、池田市教育委員会が昭和63年度国庫補助事業（総額3,000,000円、国庫50％、府費25％）として計画、実施した埋蔵文化財の緊急発掘調査概要報告である。

2．本年度の調査地及び期間は下記のとおりである。

池田城跡		
88－2次	池田市建石町1丁目3270	昭和63年5月25日～6月2日
88－3次	池田市上池田1丁目397－1	昭和63年9月8日～9月17日
88－4次	池田市五月丘2丁目38－2	平成元年1月9日～1月24日
宮の前遺跡		
88－2次	池田市石橋4丁目86－1	昭和63年11月4日～11月10日
88－3次	池田市石橋4丁目59－4	昭和63年11月11日～11月28日
88－4次	池田市住吉2丁目240	昭和63年12月13日～12月20日
豊島南遺跡（3次）	池田市豊島南1丁目336－3	平成元年2月4日～2月14日

3．調査は、池田市教育委員会社会教育課文化財係が実施し、田上雅則が現地を担当した。

4．本書の執筆、写真撮影は田上が行った。編集は野村大作の協力を得て、田上が行った。また、本書の作成にあたっては野村のほか、石賀英樹、橘田正徳、大戸満成、粟田哲夫、柳本香代子、加美富子、和田野香、大槻隆浩、垣内謙治の協力があった。

5．本書で使用する色調は『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所　色票監修）によった。

6．調査の進行に当たって、富田好久氏、池田市文化財保護審議会委員橘高和明氏、大阪府教育委員会文化財保護課記念物係長石神怡氏より御指導、御助言を戴き、また、調査に際しては、施主並びに近隣住民の方々に深甚なる御理解、御協力をいただいた。末筆ではありますが、深く感謝いたします。

本 文 目 次

Ⅰ．池田城跡発掘調査……1
(1) はじめに……1
(2) 88－2次調査地……3
(3) 88－3次調査地……5
(4) 88－4次調査地……7
Ⅱ．宮の前遺跡発掘調査……9
(1) はじめに……9
(2) 88－2次調査地……10
(3) 88－3次調査地……12
(4) 88－4次調査地……16
Ⅲ．豊島南遺跡発掘調査……17
(1) はじめに……17
(2) 第3次調査地……19
Ⅳ．まとめにかえて……23

図　版　目　次

図版　1　池田城跡88－2次　(1)　調査地遠景（北から）
(2)　調査地全景（南から）

図版　2　池田城跡88－3次　(1)　調査地全景（東から）
(2)　落込み検出状況

図版　3　池田城跡88－4次　(1)　トレンチ全景（北から）
(2)　落込み検出状況

図版　4　池田城跡88－2次・3次出土遺物
(1)　88－2次出土遺物
(2)　88－3次出土遺物

図版　5　宮の前遺跡88－2次　(1)　調査前の状況（西北から）
(2)　調査地全景（北から）

図版　6　宮の前遺跡88－3次　(1)　調査地全景（東北から）
(2)　ＳＤ－1検出状況

図版　7　宮の前遺跡88－3次　(1)ＳＤ－2・3検出状況（北から）
(2)　ＳＤ－2検出状況（南から）

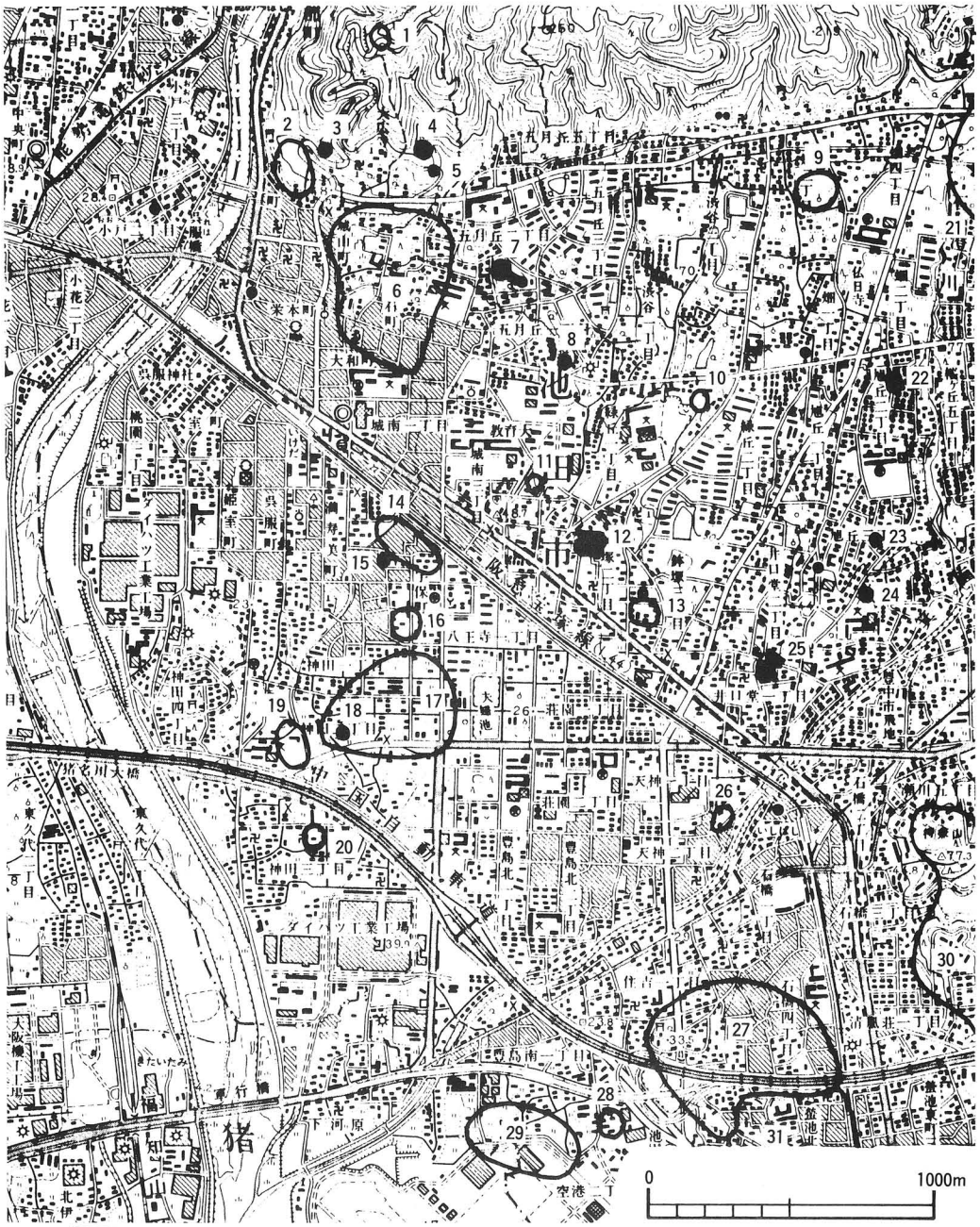
図版　8　宮の前遺跡88－3次　(1)ＳＤ－2遺物出土状態（東から）
(2)　同　上

図版　9　宮の前遺跡88－3次　(1)ＳＫ－1土器出土状態（南から）
(2)　同　上（西から）

図版　10　宮の前遺跡88－4次　(1)　調査前の状況（東から）
(2)　遺構検出状況（東から）

図版　11　宮の前遺跡88－3次出土遺物

図版　12　豊島南遺跡3次　(1)　トレンチ全景（東から）
(2)　同　上（西から）



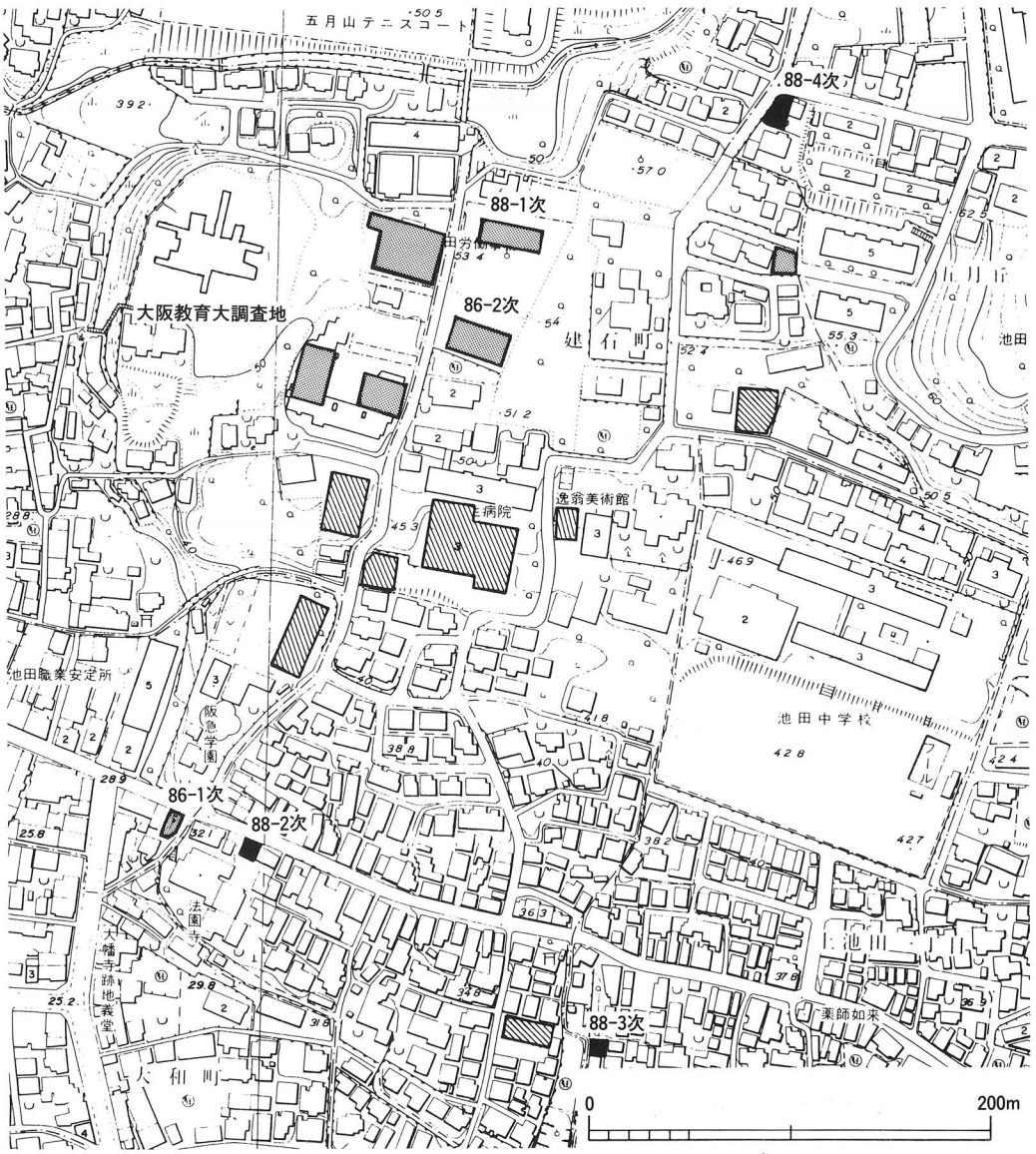
1．愛宕神社遺跡　2．伊居太神社参道遺跡　3．紅葉古墳　4．娯三堂古墳
5．娯三堂南古墳　6．**池田城跡**　7．池田茶臼山古墳　8．五月ヶ丘古墳
9．京中遺跡　10．夏湖池遺跡　11．鉢塚北遺跡　12．鉢塚古墳
13．鉢塚南遺跡　14．禅城寺遺跡　15．宇保猪名津彦神社古墳　16．宇保遺跡
17．神田北遺跡　18．脇塚古墳　19．門田遺跡　20．神田南遺跡
21．新稲西遺跡　22．野田塚古墳　23．狐塚古墳　24．石橋古墳
25．二子塚古墳　26．天神遺跡　27．**宮の前遺跡**　28．住吉宮の前遺跡
29．**豊島南遺跡**　30．待兼山遺跡　31．蛍池北遺跡

池田市内遺跡分布図

Ⅰ．池田城跡発掘調査

1．はじめに

池田城は、池田市と川西市の境を南北に貫流する猪名川の東方、五月山塊から南方へ派生する洪積台地縁辺部に築造された国人池田氏の居城である。地形的に旧池田村東方の高所を占め、西国街道や能勢街道、丹波街道など当時の主要幹線を押さえる要衝で、また、上述した猪名川や五月山塊が自然の要害となり、位置、地形ともに南方への防御の場所として絶好の選地を示している。



第１図　調査地位置図（斜線部は大阪府教育委員会調査）

池田城跡の現状は、主郭部を除いて往時の姿を全く留めていない。主郭部は城域の西北部に位置し、東西約80m、南北90mを測る。北側及び西側は比高差約10mの断崖をもち、東側は幾つかの折れをもつ最大幅25mの堀によって画される。また、東側と北側は土塁、南西側には腰郭と思われる平坦部が認められ、堅固な構えをみせている。この主郭部内は約6000㎡の平坦面が広がり、昭和43・44年に大阪教育大学により一部発掘調査が行われている。この調査では礎石をもつ建物跡や石敷の水路、枯山水様の庭園跡が検出されており、『政覚大僧正記』の「早朝温泉寺ヲ面々立、池田庭倉以下これを拝見す、目を驚かす者也」（原文一部漢文）という記載を裏付ける重要な成果が得られている。

主郭部の他は既に宅地化されているために殆ど城郭の痕跡を留めず、また、詳細な絵図面もなく完全に縄張りを復元するには至っていない。しかし、近年の開発に伴う発掘調査により、主郭部を取り巻く堀、土塁、あるいは建物跡が検出されている。こうした発掘調査の成果から、東西330m、南北550mの城域を有し、杉ヶ谷川によって形成された開析谷を背後に控え、南方及び東方へ構えをもつ城郭であることが判明している。但し、この城域であれば、南側を能勢街道が横断することになるが、元禄10年の池田村絵図に描かれた池田城跡付近を通過する能勢街道を見ると、直線でなく幾つもの屈曲部をもっていることが判る。このことから、城域に街道を取り込んで外構えを形成し、後には、町屋をここへ集中させることにより小規模な総構えを見せていたものと考えられる。

現在判明している城域の形成時期は、資料が整っておらず明らかにされていないが、『大乗院寺社雑事記』の文明元年（1469年）落城の記載はこれを推定する手掛かりになる。これは、応仁の乱勃発の後、北摂地方を舞台として細川方、大内方が激突した際、他の諸城が大内方に陥落したものの、池田城のみ細川方の拠点として最後まで籠城戦をおこなって落城したことを記したもので、おそらくこの頃までに、館から籠城戦に耐え得る城郭として整備されていたものと推定される。そして、池田氏は、近隣の小領主を給人として隷属化し、また、荘園の私領化に伴う経済力の高揚により摂津国衆の盟主としての地位を確立し、天正２年（1574年）、池田氏に変わって城主となった荒木村重が有岡城へ入城するまでの間に、着々と城郭の整備が進められたものと考えられる。但し、上述したように、池田城跡の現状は殆どが宅地化されているため、縄張りの詳細については不明な点が多く、外構えや総構えの問題も含め城域と城下町との関わりについても明らかではない。また、廃城の時期も判明せず、多くの課題が残されている。

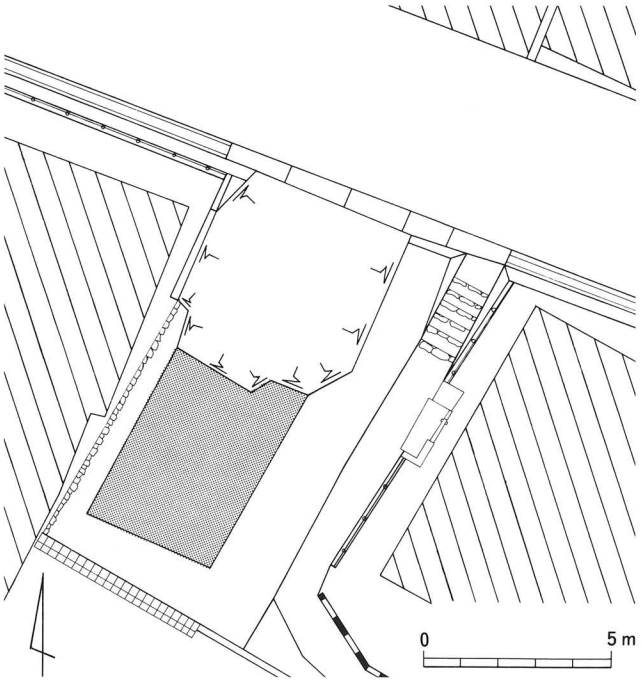
この池田城跡の城域は上述したように古くから宅地化され、近年に至り、個人住宅の新築や建て替え、また、民間のマンション建設が増えてきた。本年度はこうした状況の中、池田市建石町１丁目3270、上池田１丁目397－１、五月丘２丁目38－２の三箇所において調査を実施した。

参考文献　今谷　明　「国人層の台頭」『大阪府史』第４巻　1981年

島田義明他「池田城」『日本城郭体系』12　大阪・兵庫　1981年

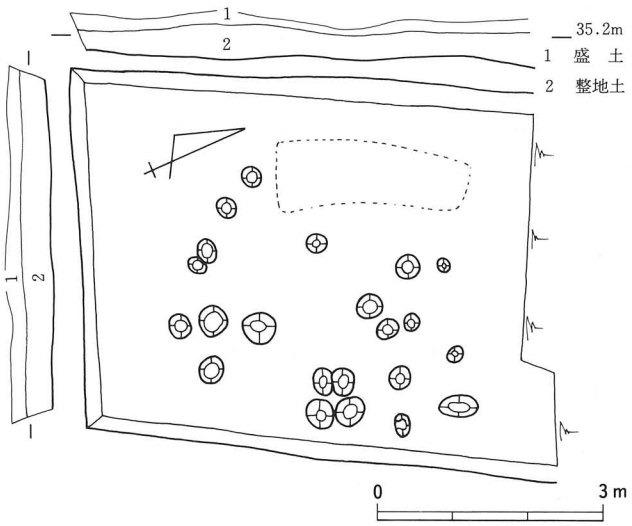
2．88－2次調査地

調査地は池田市建石町3270に所在する。本調査地は推定城域内の南部に位置するが、過去において、この周辺は大規模な調査が行われておらず、郭の状況や建物の配置など不明確な場所である。調査は店舗付個人住宅の建て替えを契機とし、建物予定地を対象にしたが、北側半分は既に削平を受けていたため、南側半分についてのみ実施した。そのため調査面積は20㎡と非常に小規模なものになった。



第2図　調査範囲図

調査の概要　　層序は3層からなる。第1層は表土、第2層は整地層で厚さは20㎝を測る。この整地層内からは少量の弥生土器（畿内第Ⅴ様式）、古墳時代後期の須恵器のほか、18～19世紀の土師器、陶器が出土している。第3層は砂礫土の地山で、池田城跡に伴う整地層あるいは遺物包含層は認められなかった。



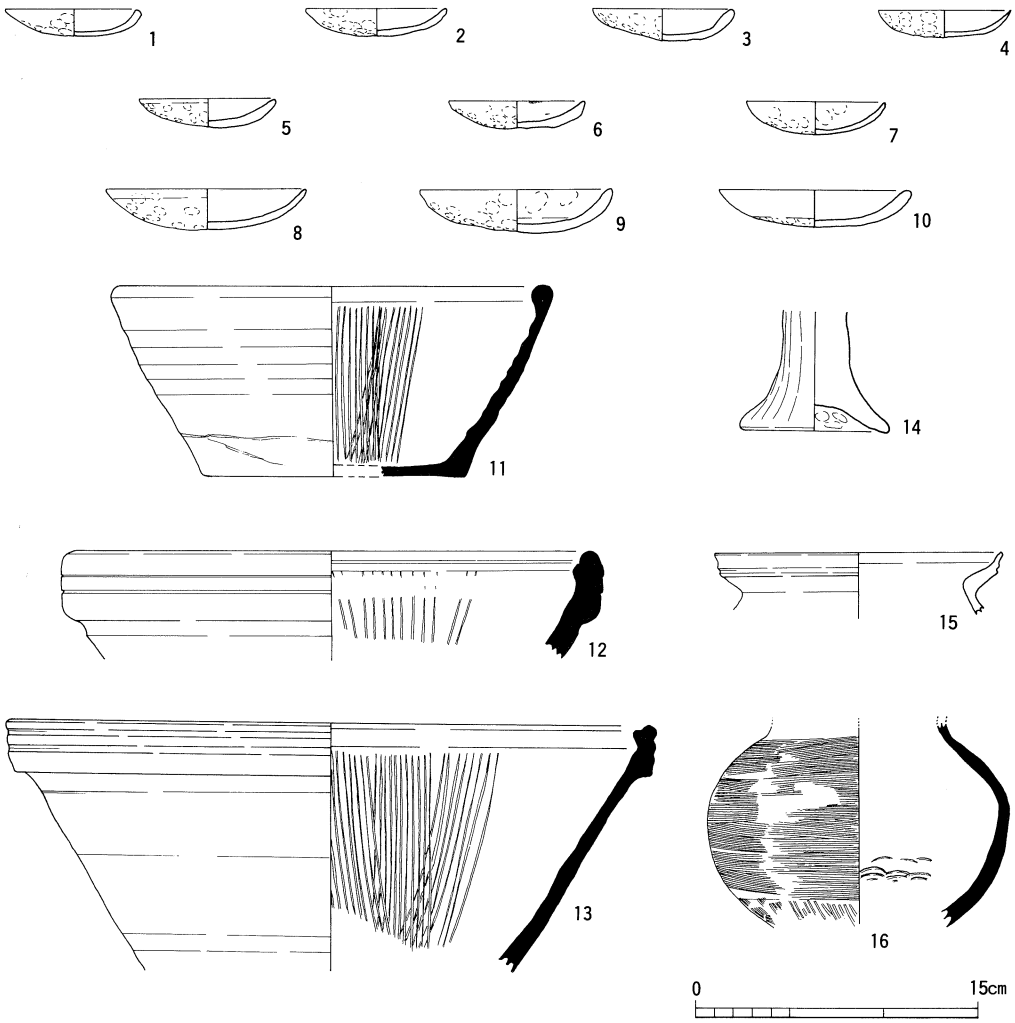
第3図　検出遺構図

地山面では柱穴を検出したが、建物の配置については調査面積が狭かったため詳らかにできない。また、これに伴う遺物もなく、池田城跡に伴う建物か否か判断し難い。

なお、上述した整地層内出土の弥生土器、須恵器から、池田城跡の北側で城山遺跡として認識されている弥生時代、古墳時代の遺構が、南側の台地縁辺部まで広がっていることが推定される。

出土遺物　　本調査地の出土遺物はすべて整地土からのものである。

土師器皿は、口径7㎝、器高1.5㎝前後の小皿と、口径10㎝、器高2㎝前後の中皿がある。



第4図　出土遺物実測図

何れも胎土は精良で、色調は淡黄白色を呈する。小皿は器壁の薄いもの（1、2、4、7）、厚いもの（3、5、6）の2種類が認められる。両者とも外面には指頭圧痕が顕著で、内面は丁寧な指ナデが施される。また内面の一部に油痕が付着しており灯明皿として使用されていることが判る。中皿は、器壁の薄いもの(8)、厚いもの（9、10）がある。外面は何れも指頭圧痕が残り、内面は丁寧な指ナデであるが、(10)のみ口縁部を丁寧にヨコナデする。

擂鉢は3種類出土している。(11)は小形のもので、口縁端部を丸くおさめる。色調は暗青灰色を呈し、内外面はロクロ整形による凹凸が顕著で、9本一単位の擂目が施される。(12)は、立ち上がりのある口縁部をもつ。この口縁部の形態は備前産のものに類似するが、色調は明黄褐色を呈する。内面は口縁部まで擂目が間隔をあけて施されるが、ヨコナデで一部消されている。(13)は備前産の擂鉢で外面はロクロ整形によるナデが若干残り、内面は11本一単位の擂目が施される。

⑭は瓦質のもので、秉燭の脚部と思われる。外面は縦方向のナデ、底面はナデ及び指オサエである。

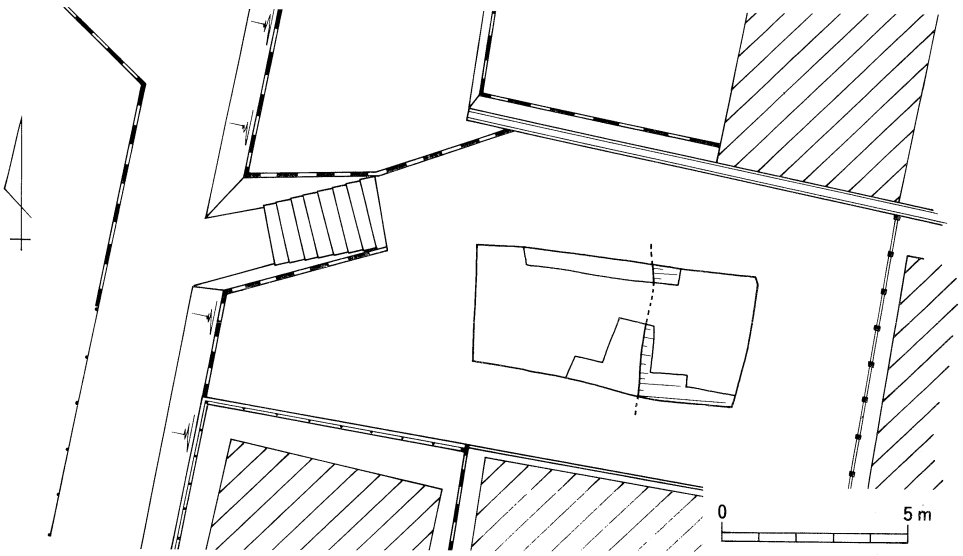
⑮は弥生土器の甕で口縁部のみ残存している。口縁部は外反し、端部はつまみ上げられている。口縁外面には一条の擬似凹線が施される。内外面とも摩滅のため調整不明である。このほか弥生土器が数点出土しているが、細片化しているため図化できなかった。

⑯は須恵器の壷で口縁部を欠損する。外面は縦方向の平行タタキの後、肩部から体部にかけてカキ目が施されている。内面は当て具による同心円文の上を丁寧にナデている。

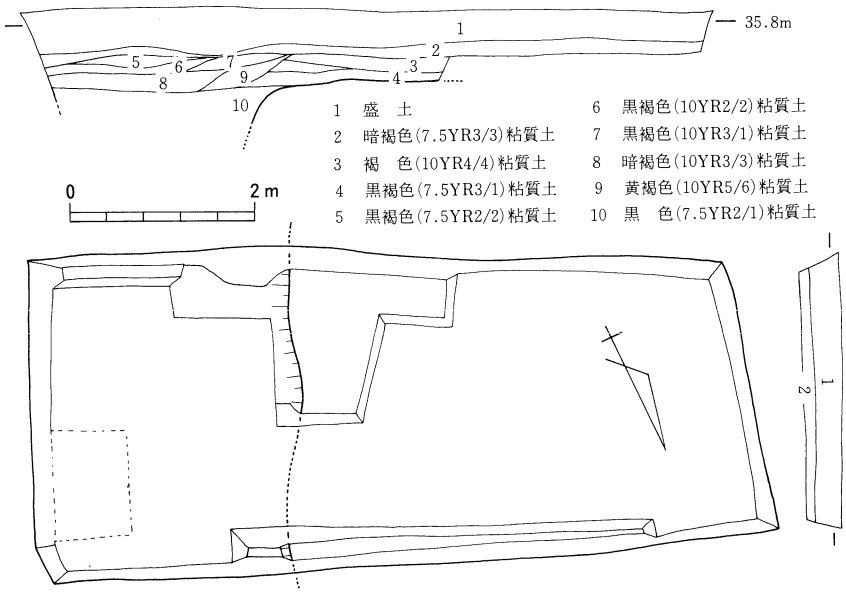
3．88－3調査地

調査地は池田市上池田1丁目397－1に所在する。本調査地は、池田城の東側を画する堀と考えられる地点のすぐ東側に位置する。個人住宅の新築に伴う調査で、これまでの所見から池田城の外側と考えていた場所ではあるが、東外郭部の状況を確認する目的で調査を実施することにした。調査は、立会時に地表下30㎝で土師器皿片が出土したことから、建築予定地を対象に進めたが、遺構面は地表下80㎝に存在することが判明し、しかも、建築物の基礎レベルより相当深いことから、部分的にサブトレンチを設定して進めた。

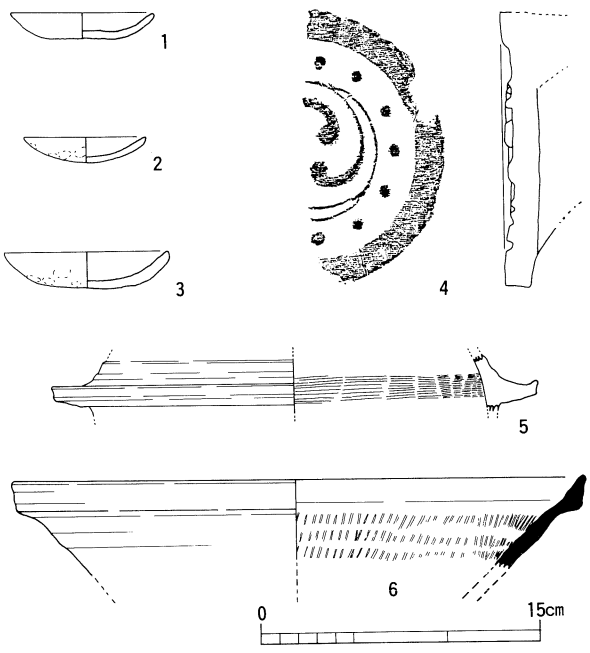
調査の概要　層序は基本的に5層からなる。このうち第1層は近・現代の盛土である。第2層は暗褐色粘質土で上述した土師器皿が出土した層である。第3層は褐色粘質土で、東側へ緩傾斜を見せている。また、近世の土師器、陶器が出土している。第4層は黒褐色粘質土の有機質土層であるが遺物は出土していない。第5層は礫を多量に含む暗黄褐色粘質土の地山で、傾斜角80度とほぼ直角の落ち込みが認められた。この落ち込みは湧水が著しく深さは明らかに



第5図　調査範囲図



第6図　検出遺構図



第7図　出土遺物実測図

しえなかったが、調査区北側に設定したサブトレンチによって、池田城の東外郭部を画すると考えられる堀とほぼ同一方向にあることが判明した。このことから、堀の東側に沿って幅約11mの平坦面の存在が推定でき、本調査地周辺が地形的に池田城の搦手になることからあるいは帯郭が設けられていたと考える事もできる。但し、城域の東南部にこのような防御施設を想定しうるか否か、部分的な調査であるために断定できず、今後の調査に委ねたい。

出土遺物　本調査区の遺物は第3層、落ち込み内から出土している。その殆どは細片化し、図化しえたのは6点だけである。

土師器皿は本調査区から出土した遺物の大半を占めるが、3点しか図化しえなかった。胎土は何れも精良で淡黄白色を呈する。(1)は口径8㎝、器高1.2㎝を測る。内外面ともナデが施される。底部は平らで糸切り痕が残る。(2)は口径6.8㎝、器高1.2㎝を測る。外面は指頭圧痕が

顕著に残り、内面は丁寧なナデが施される。底部は丸みをもち不安定である。口唇部には油痕が付着している。(3)は口径8.8㎝、器高２㎝を測り、中皿に近いものである。外面は指頭圧痕が残り、内面はナデが施される。

(4)の軒丸瓦は左巻きの三巴文で、尾が長く内区の圏線をつくっている。その周りを小さな珠文が間隔をあけて推定で12個付される。瓦ではこの他に平瓦片が数点出土している。

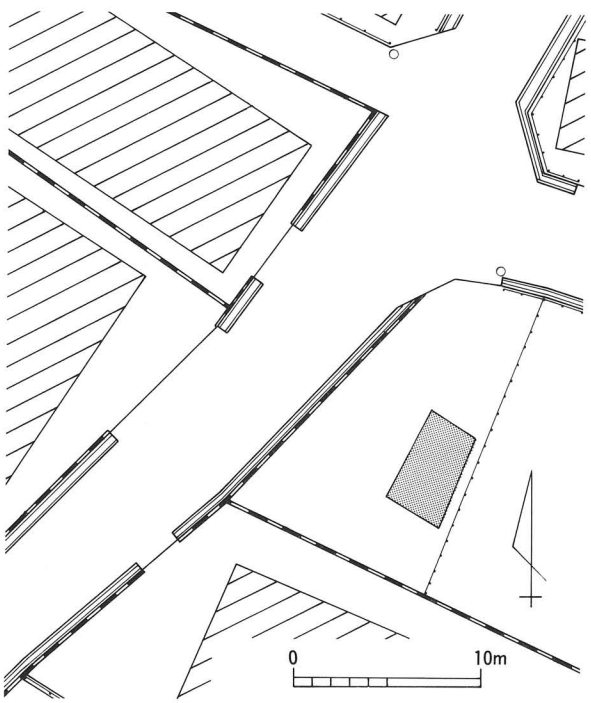
(5)は土師質の羽釜で、鍔付近のみ残存している。外面はナデで、煤が付着している。内面は横方向のハケが施される。

(6)は丹波産と思われる擂鉢で、底部を欠損する。外面はロクロによるナデ、内面はやや粗い擂目が施されるが、ロクロによるナデが強く凹凸が生じているため、部分的に擂目の及んでいないところもある。

上述したものの他に、唐津椀、染付碗の破片も若干出土している。

４．88－４調査地

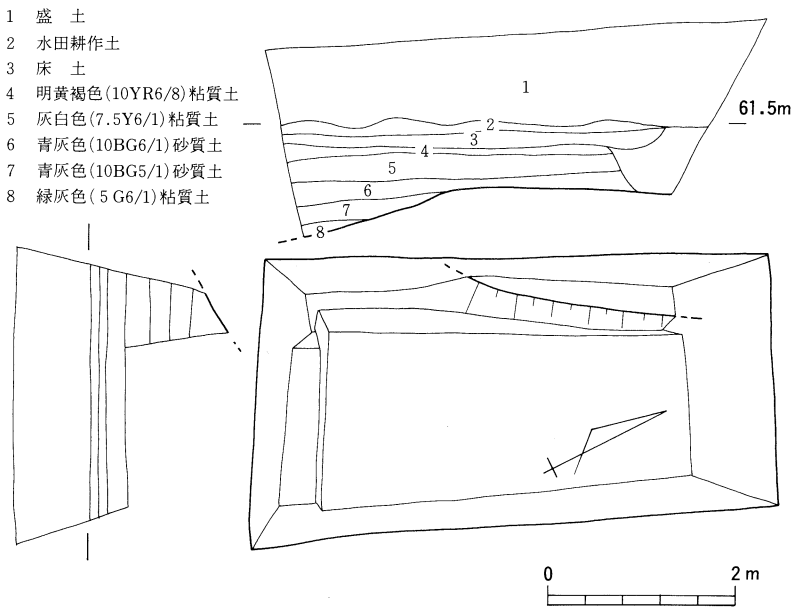
調査地は池田市五月丘２丁目38－２に所在し、個人住宅の新築を契機として実施したものである。池田城跡の東北部には、城域の北側を画する杉ヶ谷川から東方へ掘削された堀の痕跡が認められ、本調査地はその東側に位置している。現在、この堀は大部分が埋没しているため平面形を捉えることができず、あるいは堀を検出しえるものと考え、トレンチによる調査を行った。但し、調査を進めて行くうち、地山面が建築物の基礎レベルに比してが相当深いことが判明したため、一部サブトレンチを設定して地山面の状況を確認した。



第８図　トレンチ位置図

調査の概要　　層序は７層からなる。このうち第１層は盛土、第２・３層は水田耕作土及び床土である。第４層は明黄褐色粘質土、第５層は礫を若干含む灰白色粘質土、第６層は青灰色砂質土である。何れの層内にも遺物は含まれない。第７層は礫を多量に含む暗黄褐色粘質土の地山で、東北－西南方向の谷の一部を検出した。この谷は30度の傾斜角で東南方向へ落ちるもので、池田城跡の東側を南北に走行する谷につながるものと考えられる。

以上のように、この調査では谷の検出に留まり、上述した堀を確認すること



第9図　トレンチ平・断面図

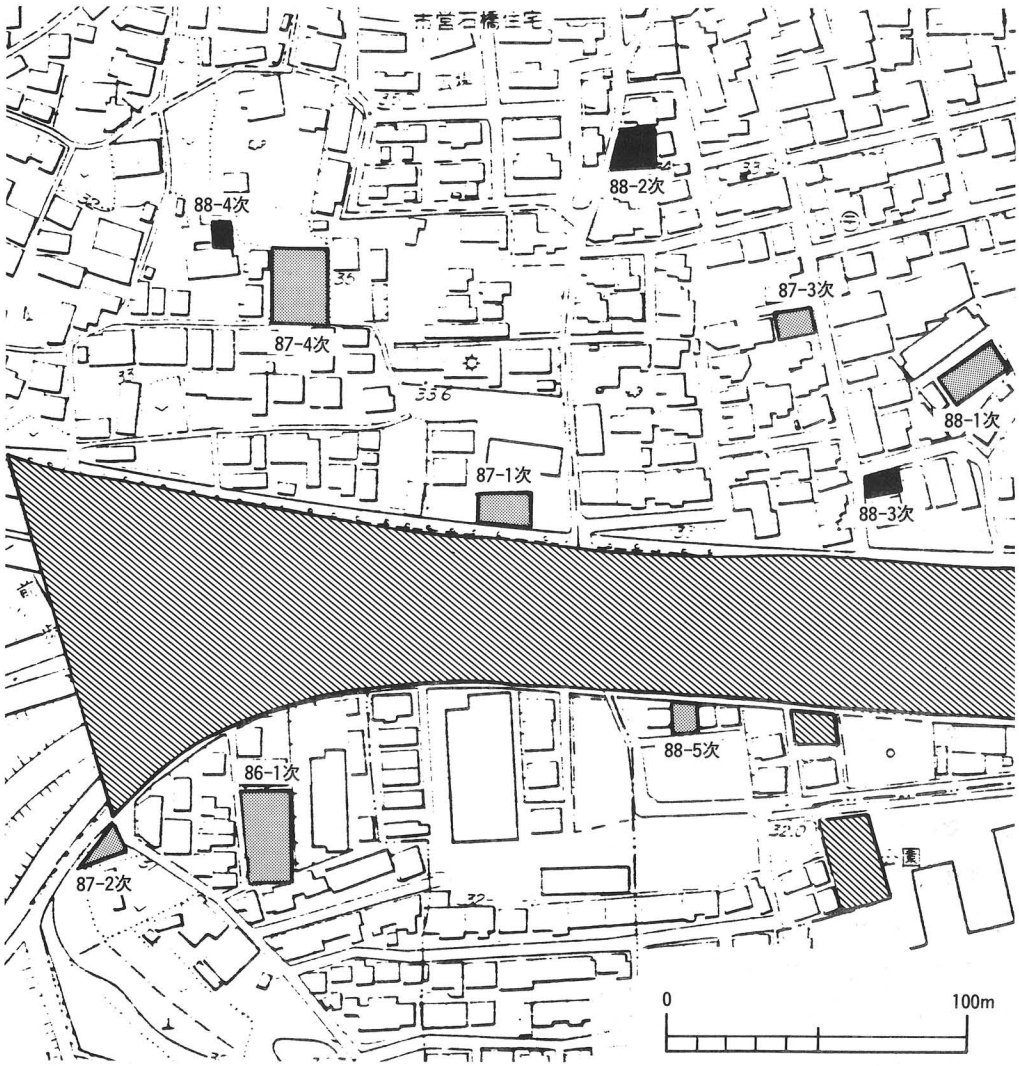
ができなかった。しかし、この谷の方向から、本調査地のすぐ南に杉ヶ谷川と谷が最も接近した箇所を想定でき、恐らくこの箇所を堀切し、東北部の外郭にしているものと考えられる。

Ⅱ．宮の前遺跡発掘調査

1．はじめに

宮の前遺跡は、現在の池田インターチェンジ東方、行政区画で言えば池田市石橋４丁目、同住吉１・２丁目、豊中市蛍池北町に広がる。その範囲は東西700ｍ、南北900ｍを測り、現在までの調査により、弥生時代から中世を中心とする遺跡であることが判明している。

本遺跡は待兼山の丘陵より西方へ発達した洪積台地に立地している。この洪積台地は猪名川によって形成された沖積平野と約10ｍの比高差を有し、一種の独立丘陵としての様相を呈している。また、台地上は比較的起伏が少なく居住地として適しており、弥生時代から現代に至るまで累々と生活の営まれてきた場所である。



第10図　調査地位置図（斜線部は大阪教育委員会ほか調査地）

本遺跡の発見は、昭和の初頭に地元の学生によって石器や土器が採集されたことを端緒とし、その後、郷土史家によって紹介され、川西市加茂遺跡とともに台地上に営まれた弥生時代の集落跡として位置付けられることとなった。

この宮の前遺跡は、発見後およそ40年間は本格的な調査が行われず、遺跡の性格や規模など具体的な内容が不明のままであったが、昭和43・44年の、中国縦貫自動車道建設に伴う調査では本遺跡の性格を捉えうる重要な成果があった(1)。この調査では、弥生時代の方形周溝墓、木棺墓、土壙墓、竪穴式住居跡が検出され、墓域と居住域を同時に把握できる希有な例として学会でも重要な遺跡として位置付けられた。また、墳丘の削平された方墳、古墳時代の竪穴式住居跡、奈良時代の掘立柱建物跡、井戸、平安時代以降の掘立柱建物跡も検出され、弥生時代から中世に及ぶ複合遺跡として認識されることとなった。

最近では、大阪府教育委員会、池田市教育委員会で、主として民間の開発に伴う事前調査を実施し、本遺跡の性格をより具体化できる成果を得ている。特に弥生時代については、第Ⅲ様式から第Ⅳ様式前半の遺構、遺物が顕著で、第Ⅴ様式から古墳時代前半期のものは殆ど認められないことが判明している。また、昭和61年の大阪府教育委員会の調査では、1点ではあるが国府型ナイフ形石器が出土しており、豊中市蛍池西遺跡で出土したもの(2)とあわせ、本遺跡周辺に旧石器時代の遺跡が存在することを推測し得ることとなった。

以上のように、本遺跡の様相が徐々にではあるが解明できつつあるが、古くから住宅地となっている関係で、頻繁に開発が行われている場所である。また、本遺跡は遺構面まで非常に浅く、木造建築の基礎工事でも十分破壊される危険性をもっており、現在までに20回近くも発掘調査が行われてきた。

本年度は、こうした状況の中、池田市石橋4丁目86－1、石橋4丁目59－4他、住吉2丁目240の三箇所において調査を実施した。

註

(1) 宮之前遺跡調査会『宮之前遺跡発掘調査概報』 1970年

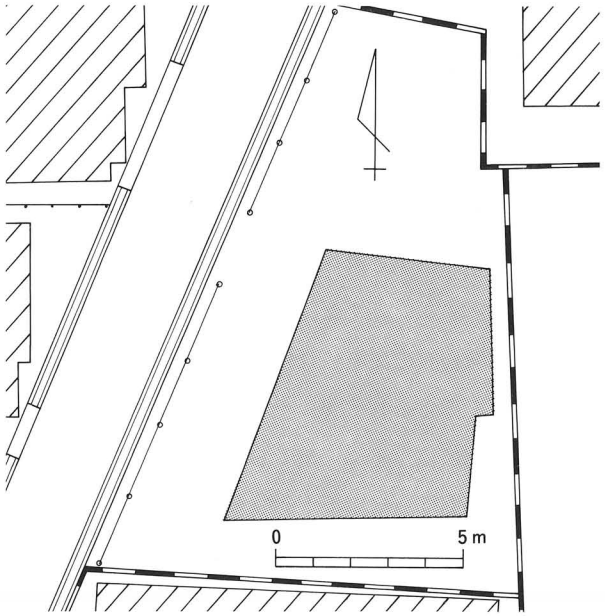
(2) 豊中市教育委員会『蛍ヶ池西遺跡』(『豊中市文化財調査報告第24集』1988年)

2．88－2次調査地

調査地は池田市石橋4丁目86－1である。個人住宅の改築に伴う立会調査の結果、地表下50cmで遺物包含層を確認したため、建物予定地を対象に調査を進めた。

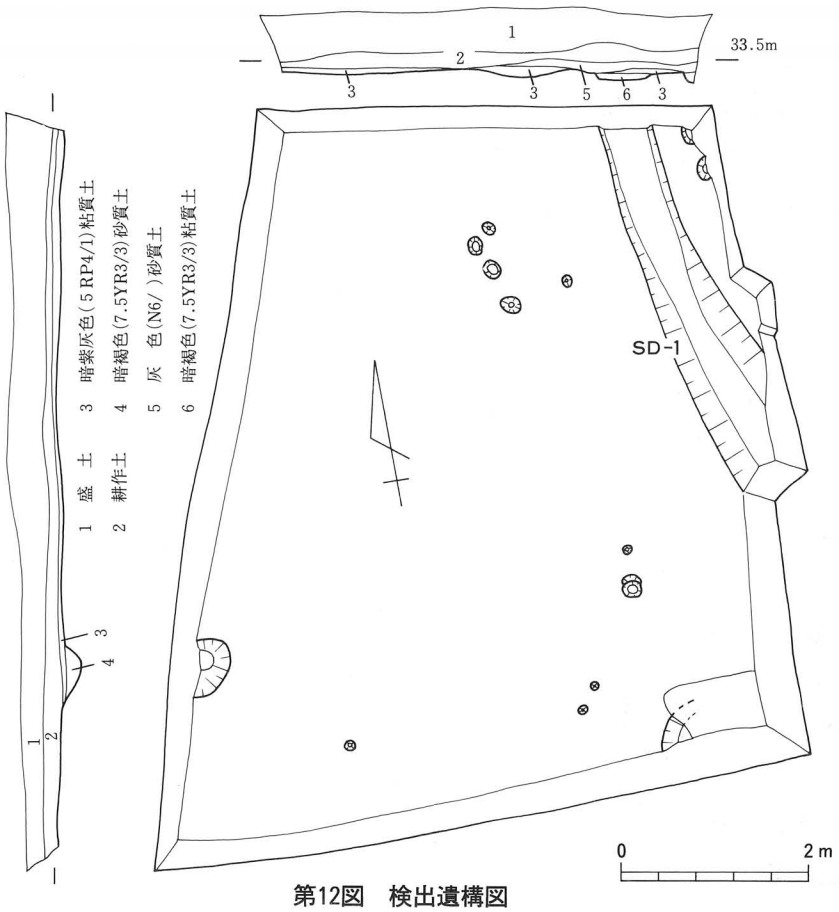
調査の概要　層序は4層からなる。このうち第1層は現代の盛土、第2層は畑作に係る耕作土である。第3層は暗紫灰色粘質土の遺物包含層であるが、細片化した遺物を微量含むにすぎず、また調査区内にも部分的には残存しているのみである。第4層は黄褐色粘質土の地山で、この上面で遺構を検出した。

検出した遺構は、主として調査区の東側に集中し、大部分は後世の削平によって失われてい



第11図　調査範囲図

る。また、遺構の残存状態は非常に悪いものである。ＳＤ－１は、幅60～90㎝、深さは８㎝で、断面形態は逆台形を呈する。ほぼ南北に走行し、東方へ微妙に曲がっている。埋土は暗褐色粘質土で少量の弥生土器を含んでいる。但し、時期を比定しうる程は残存していない。他に柱穴あるいは杭跡と考えられるピットがあるが、上述したように調査区の大部分が後世の削平を受けていることから、建物の配置等は明らかにできない。



第12図　検出遺構図

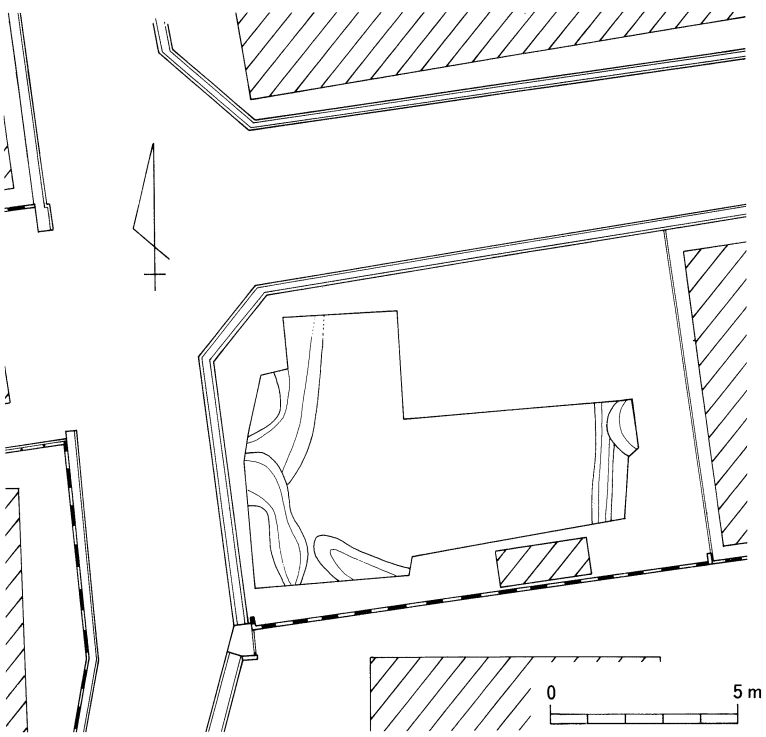
3．88－3次調査地

調査地は池田市石橋4丁目59－4他に所在し、個人住宅の改築に伴う事前調査として実施したものである。本調査地は、昭和43・44年の中国縦貫自動車道建設に伴う調査地の東北部に位置し、弥生時代中期の方形周溝墓の広がっていることが予想されたため、建物予定地を対象として調査を進めた。

調査の概要　層序は3層からなり、第1層は畑作に係る耕作土、第2層は黒色粘質土の遺物包含層で、調査区の西側に一部残存しているにすぎない。また、出土した遺物も少量で、しかも細片化していた。第3層は黄褐色の地山で、調査区の東半分は耕作によって削平を受けていた。検出した遺構は弥生時代中期の方形周溝墓と考えられる溝、土坑、ピットがある。

ＳＤ－1は幅60～70㎝、深さは15㎝を測り、底面は広く平坦である。断面形態は緩いU字形を呈し、溝側面の傾斜は東側は緩やかであるが、西側は急な立ち上がりを見せる。検出時は遺構埋土と遺物包含層との判別が非常に困難であったため、後述するＳＤ－2、4と同一のものと考え、ＳＤ－3との位置関係から一辺10ｍの方形周溝墓を想定した。しかし、埋土除去作業を進めていくうち、このＳＤ－1は南側に向かって漸次浅くなり、また西側の溝上端は西方へ屈曲していることが判明した。溝内から、底面より7㎝遊離して弥生時代中期の壷肩部が出土した。おそらく、溝が埋没する過程で流入したものと考えられる。

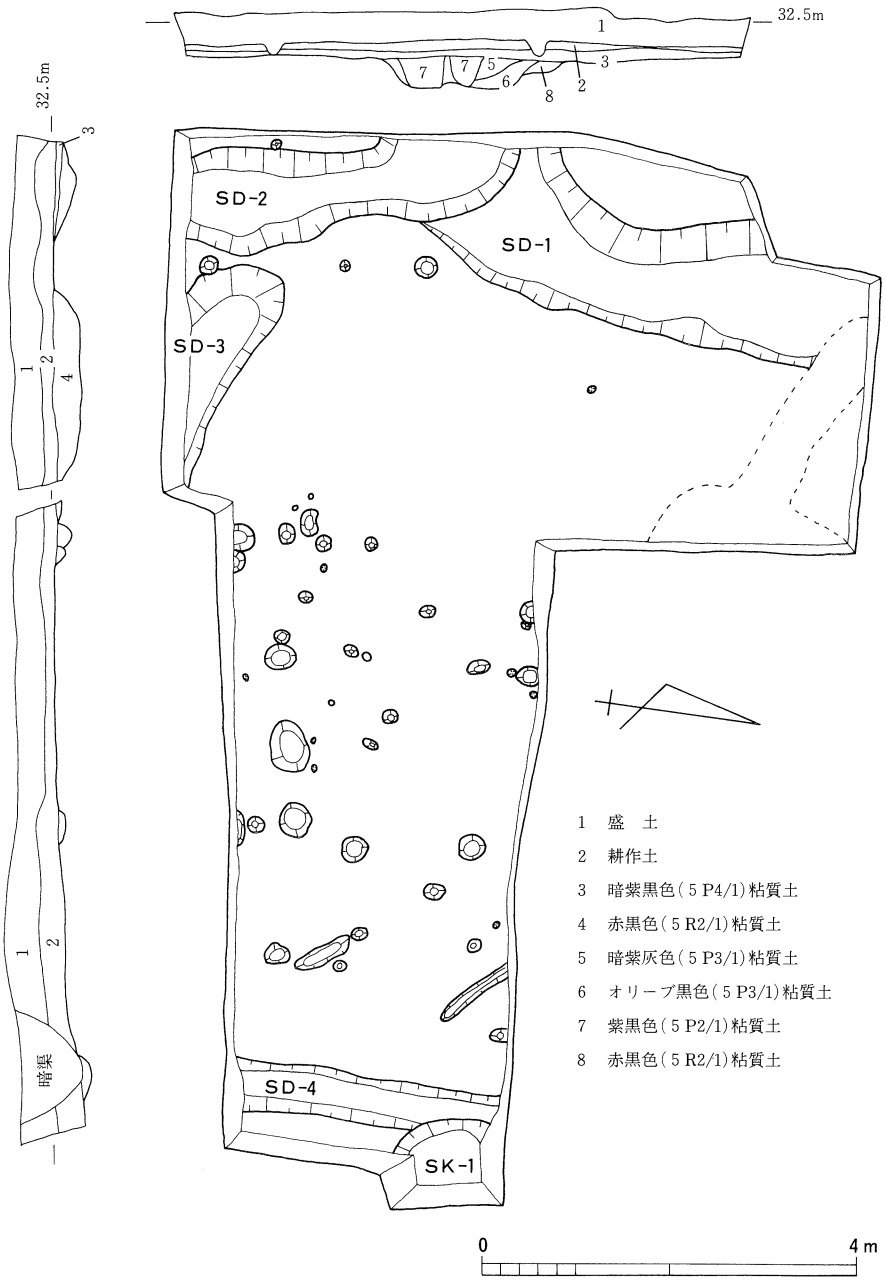
ＳＤ－2はＳＤ－1の南側に位置し、幅40～60㎝、深さ30㎝、断面形態は逆台形を呈するものである。平面形はほぼ南北に走行し、ＳＤ－1と接する箇所で西側へ屈曲している。ＳＤ－1との前後関係については、断面観察からＳＤ－1埋没後にＳＤ－2が掘削されていることが判明した。このことから、南北に2基並ぶ方形周溝墓を想定でき、また両者が溝を共有するものではなく時期差の存在していることが推定できる。溝の埋土からは



第13図　調査範囲図

第Ⅲ様式と考えられる土器片の他、屈曲部付近からはほぼ全形を窺える長頸壷が出土した（第15図、第17図　3）。これは、溝が10㎝埋没した後、殆ど原形を留めず細片化して一塊となっており、おそらく、破砕して捨てられたものと考えられ、溝内に供献されたもの、もしくは溝の外にあって転落したものだとは考え難い。

ＳＤ－３は調査区南西部で一部検出したものである。幅１ｍ、深さ30㎝を測り、断面形態は緩いU字形で、底面は広く平坦である。出土遺物はまったく認められなかった。溝の断面形態が

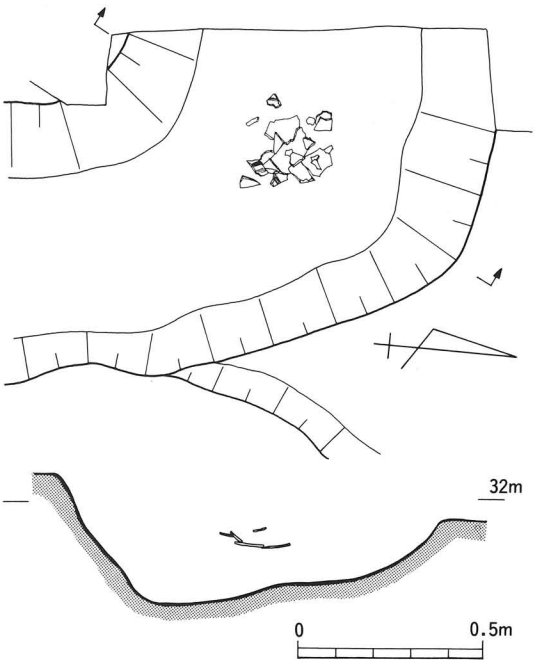


第14図　検出遺構図

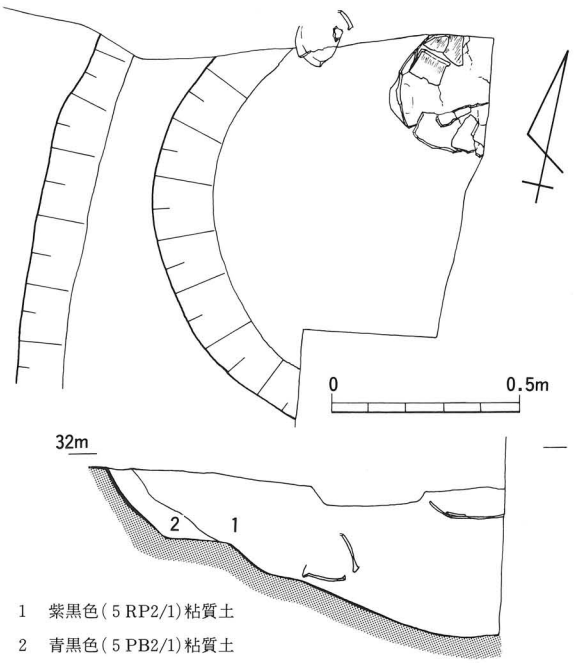
ＳＤ－１・２と類似しているため、調査区の南側に方形周溝墓が広がっている可能性がある。

ＳＤ－４は調査区の東側で検出したもので、暗渠によって上面が著しく削平され、溝底面がかろうじて残存していた。ほぼ南北に走行し、現存幅は45㎝、深さ10㎝を測る。出土遺物は認められなかった。

ＳＫ－１は、上述のＳＤ－４埋没後に掘り込まれたもので、一部東側へ拡張したものの、更に東へ広がっていたため、規模は明らかに出来なかったが、平面形は円形と考えられる。また、深さは40㎝を測る。断面を観察すると紫黒色粘質土一層のみであり、一気に埋没しているものと考えられ、ほぼ底面に接して小形の甕が二個体、上面で大形の甕が出土した。この大形の甕は一部耕作により欠損していたが、ほぼ据えられた状態であり、あるいは土坑が埋没する過程で生じた窪地を利用し甕棺として埋置した可能性もある。しかし、骨などの遺存物がなく、この甕の性格については詳らかに出来ない。



第15図　SD－２遺物出土状態実測図

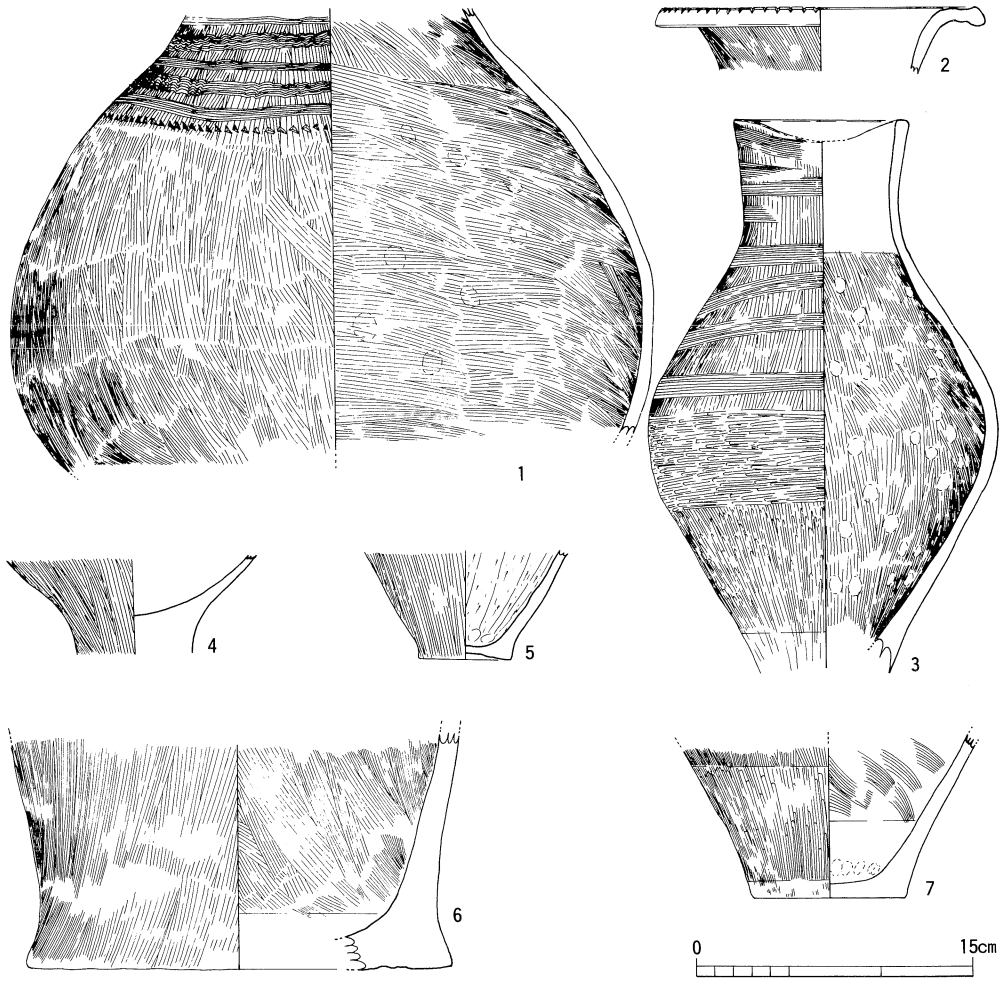


1　紫黒色(５RP2/1)粘質土
2　青黒色(５PB2/1)粘質土

第16図　SK－１遺物出土状態実測図

出土遺物　本調査地より出土した遺物は上述した遺構からのもの、包含層からのものがある。包含層のものはすべて細片化して図化できず、遺構出土のものについて述べる。

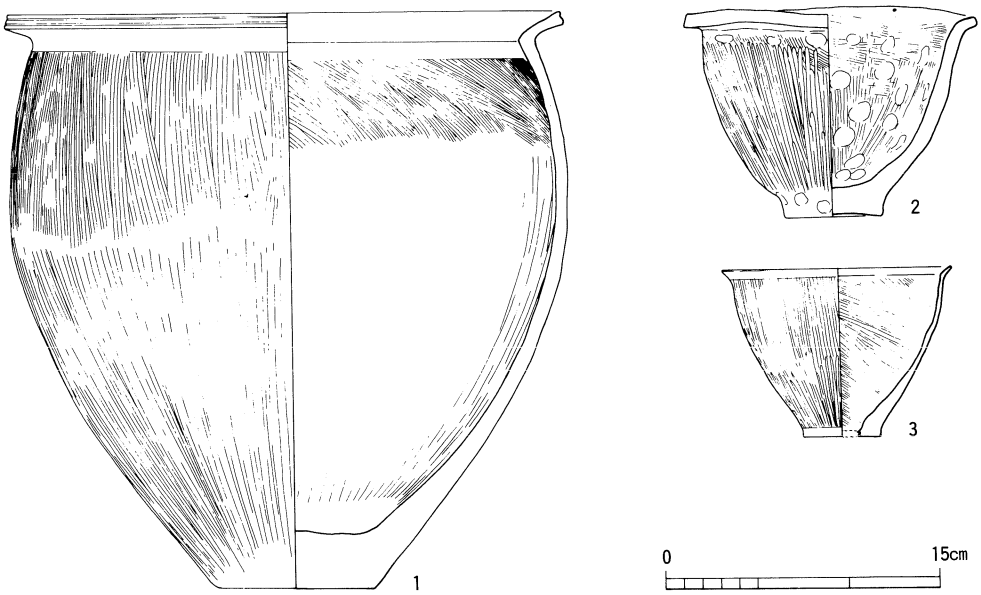
ＳＤ－１（第17図　１）大形の壷であるが、口縁部及び底部を欠損する。体部は張り、頸部に向かって窄



第17図　出土遺物実測図

まっている。外面は縦方向のハケで、直線文と稚拙な波状文が交互に、その下には刺突文が施される。

ＳＤ－２（第17図　２～７）⑵は広口壷で、口縁部は外方へ大きく開き、端部は上下に若干肥厚して斜めの面をもつ。また上端には刻み目が施される。外面は縦方向のハケ、内面はナデである。⑶は長頸壷で、底部を欠損する。張りのある体部から若干外反気味に立ち上がり、口縁端部は面をもつ。口径の⅓を浅くえぐり取る。外面の調整は口縁部から頸部にかけ縦方向のハケ、体部付近は横方向のヘラミガキ、下半部は縦方向のヘラミガキである。また口縁部から頸部にかけて８条の櫛描き直線文が雑に施される。内面は縦方向のハケで上方はナデである。⑷は底部であるが、器種は判別し難い。外面は縦方向のハケであるが、内面は摩滅のため調整不明である。⑸は甕の底部と思われる。やや上げ底気味で器壁は非常に薄い。外面は縦方向のハケ、内面は粗いヘラケズリが施される。⑹は大形の壷底部である。地面に接する部分は自重

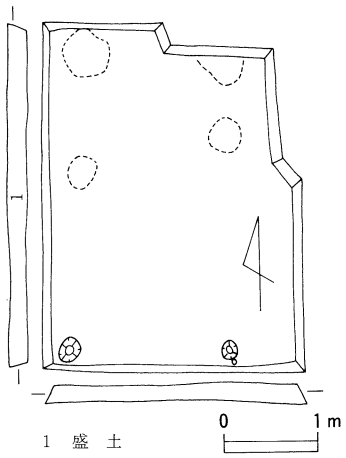


第18図　出土遺物実測図

のためか外方へ張り出している。内外面ともハケが施される。(7)は底部であるが器種は判別し難い。外面はハケの後ヘラミガキ、内面はナデ及び指オサエで、部分的に斜め方向のハケが施される。

ＳＫ－１（第18図　１～３）(1)は大形の甕である。口縁部は「く」字形に屈曲し、端部は面をもち２条の沈線が施される、外面は上半部がハケで、下半部は板ナデである。また、内面は板ナデの後、上半分には斜め方向のハケが施される。(2)は小形の甕で稚拙な作りである。体部は張らず、口縁部は如意形に開く。外面は縦方向のヘラミガキ、内面は雑なハケで、部分的に指頭圧痕が残る。(3)も小形の甕である。器壁は非常に薄いが雑な作りである。底部から上方に向かって内湾気味に広がり、口縁部は小さく外方へ開く。外面は縦方向のハケ、内面は斜め方向のハケが施される。

４．88－４次調査地



第19図　検出遺構図

調査地は池田市住吉２丁目240に所在する。個人住宅の増築に伴う調査で、東に隣接する87－４次調査地では弥生時代中期の竪穴式住居跡を３棟検出していることから、本遺跡の居住域の範囲にあるものと推定したため、増築予定地を対象に調査を進めた。

調査の概要　　層序は１層で、耕作土の下はすぐ地山となる。よって、後世の削平を相当受けているものと考えられる。

検出した遺構はピット２基と杭跡１基のみで、しかも深さは５㎝と遺存度も悪い。また、出土遺物も認められなかった。

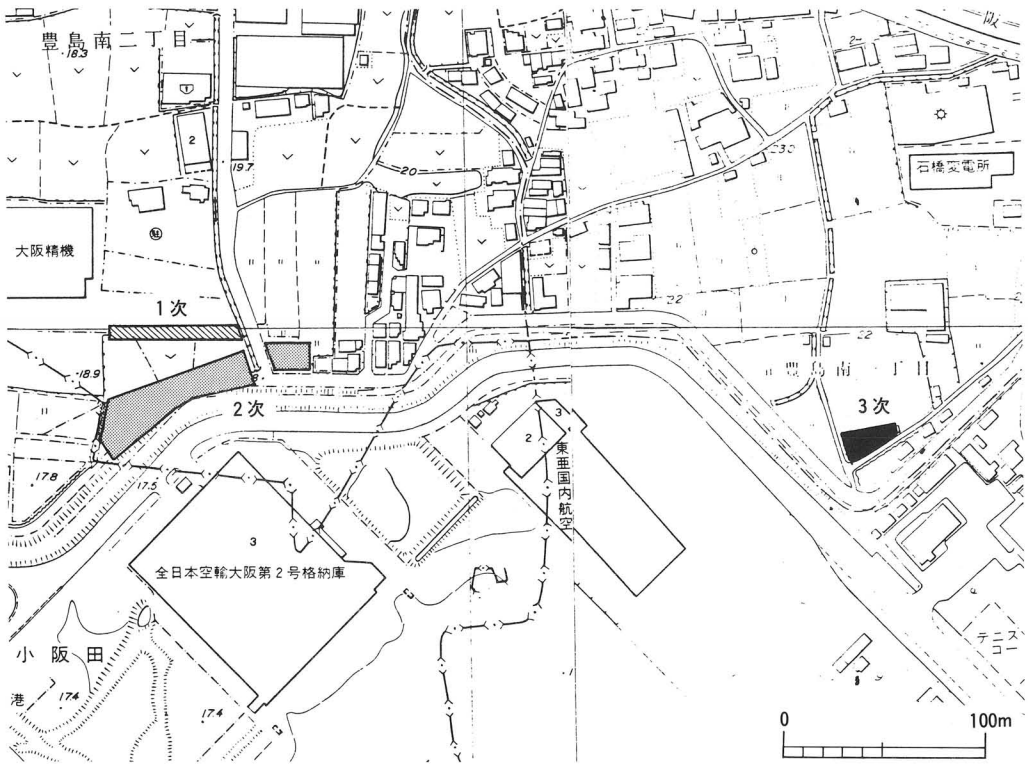
Ⅲ．豊島南遺跡発掘調査（第３次調査地）

１．はじめに

豊島南遺跡は池田市豊島南１丁目、同２丁目一帯に広がる、弥生時代から中世に亘る複合遺跡である。本遺跡は、猪名川と箕面川が合流する地点の約800ｍ東方に位置し、待兼山から西方へ張り出した洪積台地の末端部に立地している。

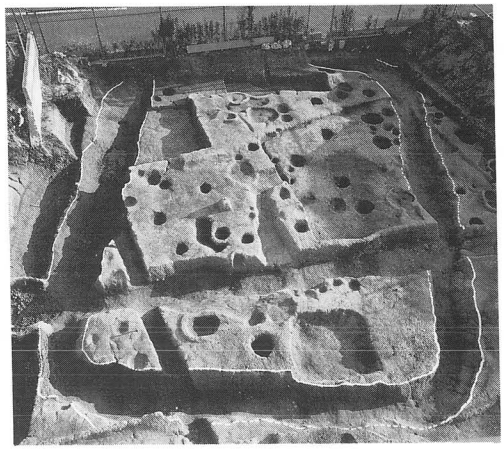
周辺の遺跡としては、東方にⅡ章でも触れた宮の前遺跡、弥生土器や須恵器が採集された住吉宮の前遺跡、宮の前遺跡と一連の集落と考えられる蛍池北遺跡[(1)]が所在し、西方の中村では外縁付紐式の銅鐸が出土している[(2)]。また、南方には弥生時代後期の大溝が検出された蛍池西遺跡[(3)]、さらに南方には、弥生時代中期の竪穴式住居跡や倉庫と考えられる掘立柱建物跡が検出された箕輪遺跡[(4)]が所在する。このように、本遺跡周辺は旧石器時代から中世に亘る遺跡が密集し、常に生活の舞台となってきた地域である。

この豊島南遺跡は、昭和55年から昭和56年に実施した池田市教育委員会の分布調査で確認されたものである。この分布調査では、須恵器片が採集されたことから古墳時代を中心とする遺跡として捉えられていたが、昭和60年に、民間の工場建設に伴って実施された大阪府教育委員会の調査では２条の大溝が検出され、埋土内より庄内期から古墳時代後期を中心とする土器が多



第20図　調査地位置図（斜線部は大阪府教育委員会調査）

量に出土し、本遺跡が長期間に亘って営まれていたことが明らかとなった。また、この溝からは縄文時代晩期の深鉢形土器片が1点出土しており、付近に同時代の遺構の存在も推測されることとなった(5)。



第21図　第2次調査地方形周溝墓

昭和62・63年に実施した阪神高速道路大阪池田線延伸工事に伴う調査では、本遺跡の性格をより具体化できる重要な成果をもたらした。この調査は約2,000㎡の調査面積を有し、弥生時代中期（第Ⅲ様式新段階）の方形周溝墓2基、庄内期に掘削された溝、同時期の竪穴式住居跡、古墳時代中期の方墳跡、古墳時代後期の竪穴式住居跡、奈良時代と考えられる総柱の掘立柱建物跡、中世の溝等を検出し、本遺跡が弥生時代中期から中世に亘って営まれていることが判明した(6)。特に弥生時代中期の方形周溝墓の検出で、宮の前遺跡のすぐ西方に別の集落の存在が明らかになり、宮の前遺跡より分岐した集落か、別に出自をもつ拠点的な集落であるのか、今後の調査に委ねられるべき課題が残されているにせよ、猪名川流域の弥生時代を考えていく上で重要な遺跡として位置付けられるものと考えられるようになった。また、この調査からは、生駒山西麓産の庄内型甕を殆ど含まない庄内期の土器が多量に出土しており、元来、不明確であった西摂平野北部の庄内式の様相を捉える上で良好な資料を得ている。

本遺跡はその存在が確認されてまだ日が浅く、現在までの調査で上述した重要な成果があったものの、遺跡の正確な範囲については把握できていない。また、宮の前遺跡や本遺跡のすぐ東に所在し発掘調査の行われていない住吉宮の前遺跡との関係も不明確であり、今後の調査に委ねるべき課題が残されている。

なお、本遺跡の現状は大部分が水田や畑地であるが、近年、工場や倉庫が建ちはじめている。このことから、将来、開発に伴う発掘調査が増大することが予想される。

註　(1)　豊中市教育委員会『蛍池北遺跡現地説明会資料』1981年

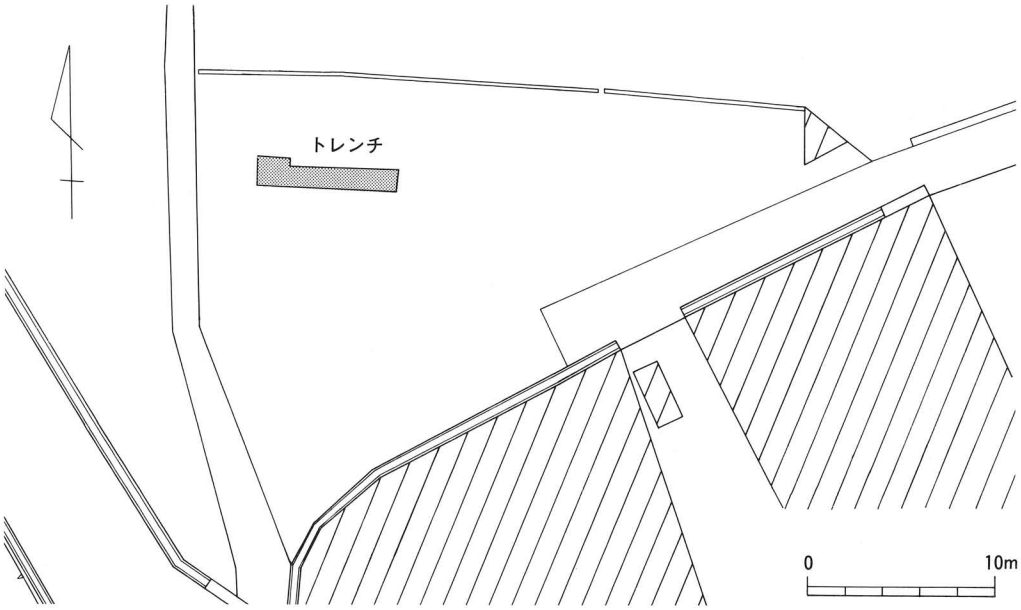
(2)　梅原末治「銅鐸に関する若干の新知見」『考古学雑誌』第31巻第5号　1941年

(3)　豊中市教育委員会『蛍ヶ池西遺跡』1988年（『豊中市文化財調査報告第24集』1988年度）

(4)　柳本照男「大塚古墳をとりまく環境」『摂津豊中大塚古墳』（『豊中市文化財調査報告第20集』1987年）

(5)　大阪府教育委員会文化財保護課技師亀島重則氏の御教示による。

(6)　阪神高速道路池田延伸線遺跡調査団、池田市教育委員会による調査で、現在調査中である。また、出土遺物も整理中で、詳細については本報告に委ねたい。



第22図　トレンチ位置図

2．第３次調査地

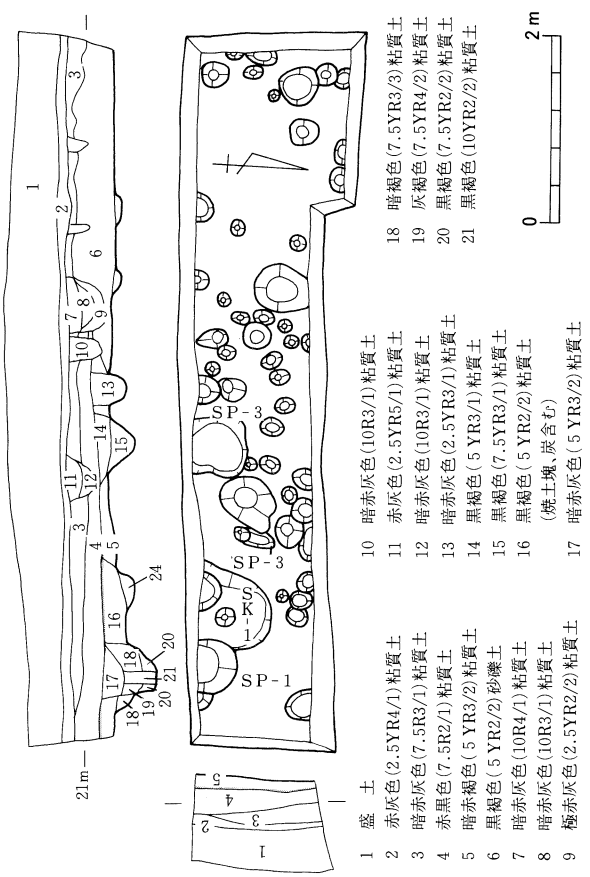
調査地は池田市豊島南１丁目336－３に所在する。自家用倉庫に伴う立会調査の結果、地表下60㎝のところで遺物包含層を確認したが、基礎工事による破壊を免れる深さであった。しかし、この敷地周辺は前述の阪神高速道路大阪池田線延伸工事に伴う試掘の結果、新たに遺跡の範囲を拡大した場所であるが、遺構の状況については不明であるため、施主の協力により一週間の調査期間を得てトレンチによる調査を実施することにした。

調査の概要　　層序は７層からなる。このうち第１層は現代の盛土で、第２層から第６層までが遺物包含層である。第２層は赤灰色粘質土で、平安時代の黒色土器、土師器を含む。第３層は暗赤灰色粘質土、第４層は赤黒色粘質土でトレンチの東側に認められ、古墳時代後期の須恵器、土師器を多量に含む。第５層は焼土を含む暗茶褐色粘質土で、上層と同様に古墳時代後期の須恵器、土師器を含んでいる。第６層は黒褐色砂礫土でトレンチの西側に認められ、東方へ傾斜面をみせるとともに、上述の第４・５層がこの傾斜面上に堆積している。このことから、一時期トレンチの東側に落ち込みが形成されていることが推定される。第７層は黄褐色粘質土の地山で、ほぼ水平の堆積を示している。

上記の層序のうち第３、５、６、７層の各上面に遺構面が認められ、第３層上面が平安時代、第５、６層が古墳時代を中心とする時期と思われるが、地山面については時期を明らかにし難い。以下、述べる遺構は第５、６層及び地山面のものであるが、遺構の大半は遺物を伴わず、遺構の時期を詳述できない。

検出した遺構はすべてピットである。遺物を伴うものとしてＳＰ－１、２、３、ＳＫ－１が

ある。ＳＰ－１、２は第５層から掘り込まれたもので、他のピットに比して大きく深度もある。ＳＰ－１は径60cm、深さ60cmを測り、平面形は円形である。埋土の断面観察により径12cmの柱痕が認められた。またＳＰ－２は東西60cm、南北は推定で70cmを測る隅丸方形のもので、やはり断面観察により径12cmの柱痕が認められた。この２基のピットは同一の掘立柱建物跡に伴うものと思われるが、ＳＰ－２の西側には同規模のピットが認められないため、トレンチの東方へ建物跡が広がっているものと推定でき、また、２基のピットの位置関係からこの建物跡はほぼ真北に主軸をもつものと考えられる。なお、この建物跡が存在していると推定される範囲には厚さ３cmのよく締まった黄褐色粘質土が広がっており、建物の床面を整えるために施されたものと思われる。埋土内からは両者とも古墳時代後期の須恵器が出土している。



第23図　トレンチ平・断面図

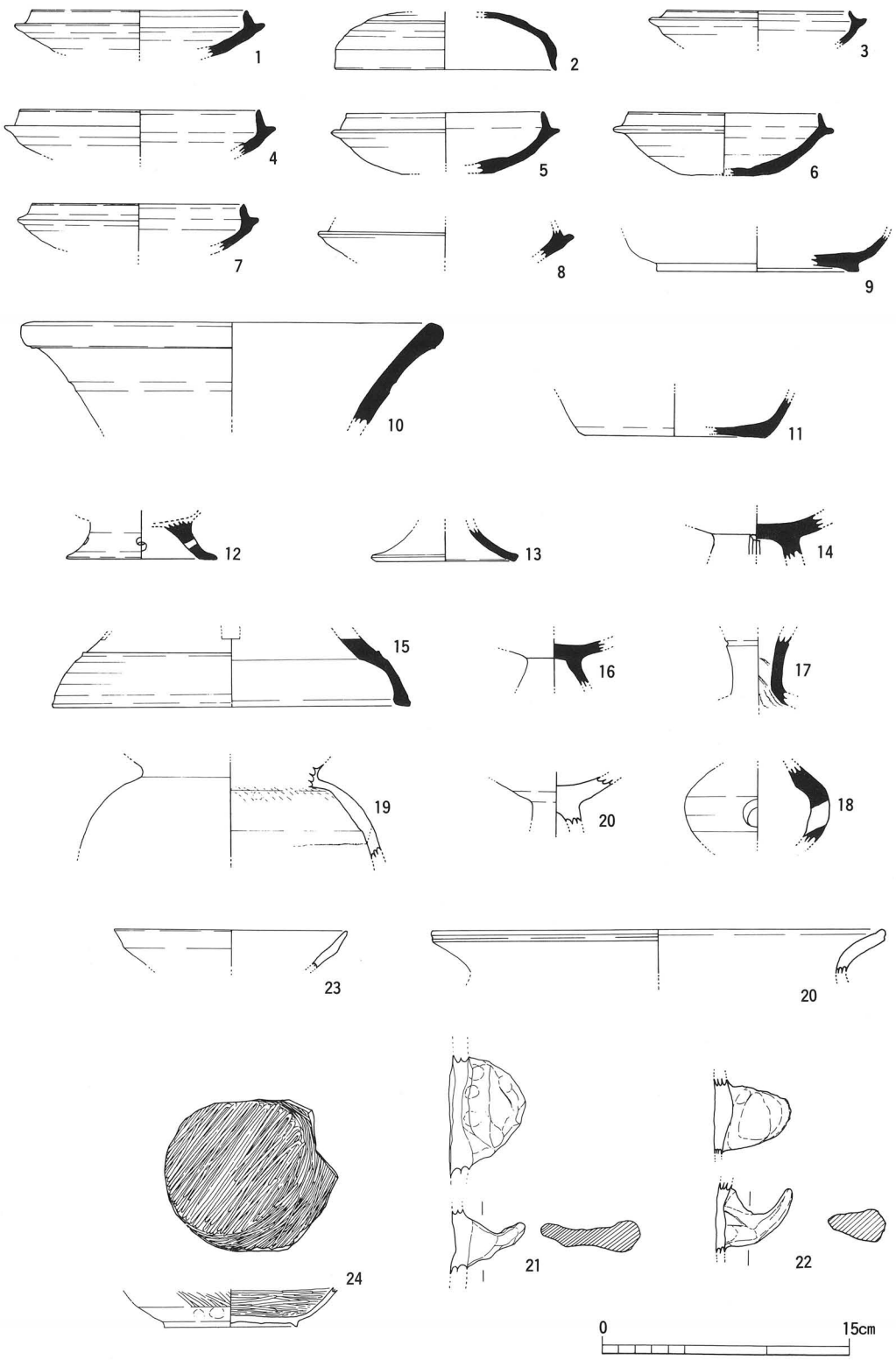
ＳＰ－３は径50cm、深さ30cmの円形を呈するピットである。底面は平坦であり柱穴と考えられるが、建物の配置等は不明である。埋土内から古墳時代後期の須恵器杯身が出土している。

ＳＫ－１は、不定形を呈し深さは25cmと非常に浅いものである。第５層より掘り込まれたもので、上面には焼土が部分的に広がり、埋土内には須恵器片が微量含まれる。

出土遺物　本調査地の出土遺物はその殆どが遺物包含層のもので,しかも細片化している。調査時では第２層と第６層は明確に分離し得たが、第３～５層は土質が比較的類似していたため混在してしまった。図化できた遺物のうちSP－３(1)、第２層（22、23）の他はすべて第３～５層のものである。また、第６層のものは細片化しており図化できなかった。

ＳＰ－３(1)　須恵器杯身で、推定口径は13cmを測り、器高は不明であるが偏平なものである。口縁部は短く内傾して立ち上がり、端部は内傾する面をもつ。

第３～５層（２～21、24、25）　杯蓋(1)は１点図化できた。推定口径は13.5cmで、口縁部は



第24図　出土遺物実測図

強いヨコナデにより外方へ向く。天井部は緩やかなカーブを描き、僅かにヘラケズリが認められる。天井部と口縁部を分ける稜は消失している。

杯身（3～10）のうち、（3～8）は古墳時代後期のもので、口径は12cm前後、14cm前後のものがある。何れも口径に対して器高が低く偏平な感を受ける。(9)は低い高台が付され屈曲して上方へ伸びるもので、(10)は平底の杯身で、淡黄褐色を呈し焼成はあまい。

(11)は壷口縁部で、端部は外方へ肥厚する。外面には浅い沈線がみられる。

(12)は低い脚部であるが器種は詳らかにできない。径1cmのスカシが施されるが、その数は破片のため不明である。

（13～16）は脚部である。このうち、(15)は裾が外方へ開き、長方形のスカシが施されるもので、脚付壷の脚部と思われる。その他は高杯の脚部で何れも小形の部類に属する。

（17、18）は甕である。(17)は頸部で、一条の沈線が認められる。(18)は体部で、中央に径1cmの円孔を上外方から穿たれている。体部は球形で頸部に向って細くなっている。

（19、20）は土師器の甕である。(19)は外面は摩滅のため調整不明。内面はナデの後、頸部付近にハケが施される。器壁は厚く粗雑な作りである。(20)は口縁部のみ残存する。内外面ともヨコナデが施される。

（21、22）は土師質の把手である。両者ともやや偏平なものであるが、(21)は幅が広く、上方へ若干曲げられ、(22)は幅が狭く、上方へきつく曲げられている。第2層から出土したものは大部分が細片化し、2点のみ図化しえた。

(23)は土師器皿の口縁部で、端部は強いヨコナデのため外方へ広がり僅かに段を有する。

(24)はA類の黒色土器椀である。底部は断面三角形の高台が付され、外面は斜め方向のヘラミガキ、下半部はナデで、内面はヘラミガキが密に施される。胎土は精良で明橙色を呈し、金雲母状の鉱物を含むことから搬入品と思われる。

Ⅳ．まとめにかえて

池田城跡は、Ⅰ章でも触れたように大部分が宅地化されているため、縄張りを完全に復元するには至らず、また、その城域も推定の余地を出るものではない。特に、城域の東側は地形的に自然の防御に恵まれておらず、何らかの防御施設を作らなければならなかったものと推定される。現在、城域の東側には南北に走行する堀状の落ち込みが認められ、今まで、この箇所を城郭の外郭部と考えてきた。88－3次調査地は上述した堀状の落ち込みのすぐ東側に位置し、堀に平行する幅11mの平坦部と、更に東への落ち込みを確認した。このことから、堀に接して帯郭状の施設を想定した。しかし、その東側に存在する落ち込みはほぼ直角に落ち込むもので、88－3次調査地の20m東において実施した立会調査では地表下1.5mでも地山面を検出することができなかったことに鑑みて幅20mの堀の存在も考慮する必要がある。あるいは、当地点の付近は能勢街道が城域に入る東側虎口と考えられ、堀一条だけの簡単な構造のみでは防御面で非常に弱いことから、一部二重の堀が設けられていた可能性もある。このことは池田城が町屋を取り込む総構えとしての城郭であったか否かという問題とも深くかかわるもので、城郭の性格にとって看過できない事と思われる。

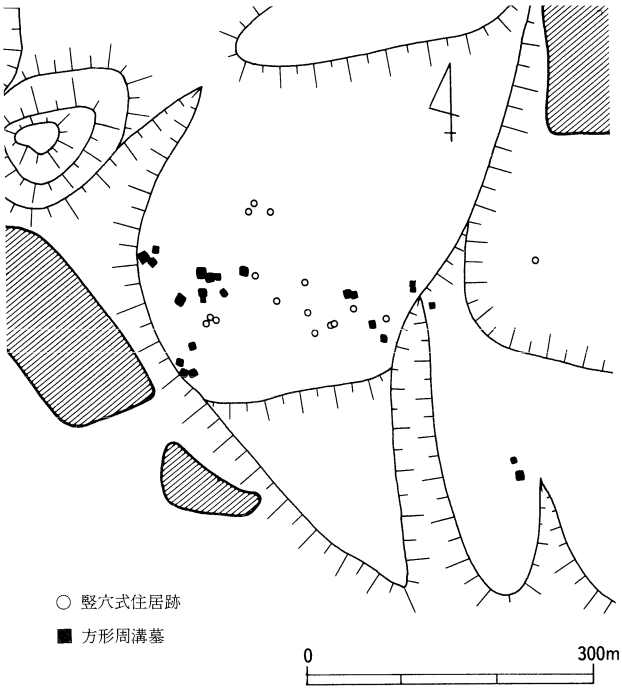
宮の前遺跡では、今年度の調査のうち、88－3次調査地で方形周溝墓と考えられる溝を検出した。よって、ここではこの成果と現在までに判明している弥生時代の集落について2、3点気が付いたことを述べてみたい。

この宮の前遺跡は、現在、宅地化に伴う盛土によって往時の微地形を視覚的に捉えることは難しい。しかし、現在までの発掘調査により遺跡の東側には南北に走行する浅い谷が、また、南側は緩やかな傾斜地が認められている。このことから、遺跡の範囲として把握しているその中央部は南側が半月状に張り出し、背後に高地を控える独立した平坦地を想定することができる。

この平坦地において営まれる弥生時代の遺構についてみると、昭和43、44年の調査[(1)]で、東西の縁辺部に方形周溝墓が検出されていることが判る。この調査では、東側の方形周溝墓は西側に比して少ないが、上述した88－3次調査地の所見より、東側もかなり広がっているものと推定される。一方、平坦地の中央部には竪穴式住居跡群が検出され、87－4次調査地では、さらに北方に広がっていることが明らかになっている。このことから、居住地と墓地との位置関係については、平坦地中央に居住域、その縁辺部に墓域という図式が想定される（第25図）。

こうした居住域と墓域の位置関係は川西市加茂遺跡[(2)]、豊中市新免遺跡[(3)]などの、猪名川流域において丘陵上に選地された拠点的集落で異なった在り方を示している。加茂遺跡は伊丹段丘の東北部に立地し、中期前半より集落が営まれる。居住域と墓域が明確には分かれるのは中期中葉から後半で、居住域は遺跡の中央部にあり、この西側をコ字状に方形周溝墓が広がって

いる。また、竪穴式住居跡の分布からあるいは居住域が二つの群を形成している可能性も指摘されている。一方、新免遺跡は豊中台地の西北部に位置するもので、三方を河川、谷に囲まれ、独立丘陵の様相を呈する台地に立地している。この範囲内に弥生時代から古墳時代を中心とする遺構が確認されている。弥生時代の集落は中期前半に始まり、中期後半に最盛期をむかえる。居住域は台地の西北部及び東北部に、墓域は台地のやや奥まった西側に広がっている。



第25図　宮の前遺跡弥生時代遺構分布略図

このように居住域と墓域の選地は必ずしも一律的なあり方を示してはおらず、集落を維持する生産地や河川の位置などの地形的条件に左右され、また、集落の大規模化に伴って徐々に形成されたものと考えられる。

宮の前遺跡は既述したように居住域が台地の中央部に、墓域がその縁辺部に広がっていると考えられるが、昭和56年の豊中市教育委員会による調査（蛍池北遺跡第１次調査）では、台地東側の谷の東南側で２基の方形周溝墓[4]が、また昭年61年の大阪府教育委員会の調査では、谷の最下部で弥生時代中期の竪穴式住居跡が検出されている[5]。こうした遺構の分布状況からみると、本遺跡の弥生集落は少なくとも２群より構成されていたものと推定することができる。この状態は、現在までの調査で判明した遺構の分布より弥生時代中期中葉に形成されるが、中期後半の方形周溝墓が少ないことからこの時期に早くも衰退の兆しをみせているようで、後期になると完全に消滅してしまう。つまり、中期中葉に集落が大規模となり、その後急激な衰退をみせているのである。上述した加茂遺跡は後期になると小規模化し、新免遺跡では集落が小規模化することなく引き続き営まれていることからみると、中期に大規模化し、後期には居住地として放棄されてしまった宮の前遺跡の特異性が認められる。

猪名川流域では弥生時代後期になると、それまでの集落構成に変動が起こり、拠点的集落の衰退と小規模集落の爆発的な増加が認められる。この宮の前遺跡の突然の消滅は、こうした社会変動が外因として当然考えられるが、内因としては、先に推定したように複数の集落によっ

て構成されていたことがその一つとして挙げられる。おそらく、集落間の紐帯は必ずしも強固なものではなく不安定な状態であったと推定でき、他の拠点的な集落と同列に位置付けることができないのではないかと考えられる。

もちろん、弥生時代が水利等による集落の有機的な結合で小地域圏を形成してたという時代背景を考慮するならば、宮の前遺跡の性格や消滅の要因については、遺跡の内情のみでは語ることはできない。このことから、本遺跡と至近距離にあり、現在のところ明らかに後期に比定できる遺構が認められない豊島南遺跡や、中期から後期に継続する蛍池西遺跡(6)、待兼山遺跡(7)などの動向と照らし合わせて考えてゆく必要がある。

豊島南遺跡では、古墳時代後期から平安時代に亘る遺構の存在が確認された。上述した第2次調査では、古墳時代後期の竪穴式住居跡を検出しているが、それ以降の遺構としては奈良時代と推定される総柱の建物跡くらいしかなく、古墳時代後期以降は本遺跡の東側を中心に広がっている可能性がでてきた。また、本遺跡の東隣に所在する住吉宮の前遺跡で須恵器が採集されていることから、相当広範囲に集落が営まれていることも推定される。地元の方々の話によれば、大阪国際空港建設時に相当量の土器が採集されたと言うことであり、元来、南方へも遺跡が広がっていたものと考えられる。しかし、昭和62年の阪神高速道路建設に伴う遺跡確認の試掘調査では、空港建設による削平が著しく既に破壊されていることが判明しており、今となっては非常に惜しまれる。

註

(1) 宮之前遺跡調査会『宮之前遺跡発掘調査概報』1970年

(2) 川西市教育委員会『川西市加茂遺跡－市道11号線にともなう発掘調査報告－』1982年

(3) 豊中市教育委員会『新免遺跡第11次発掘調査報告書』(『豊中市文化財調査報告第22集』1987年)

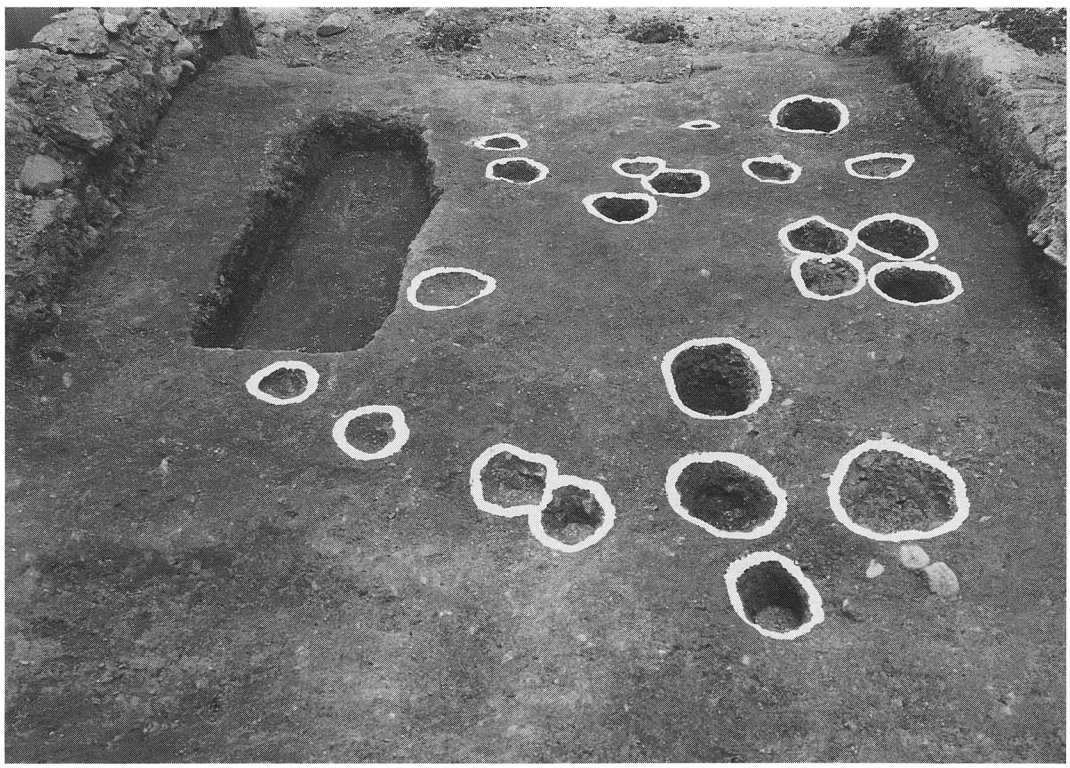
(4) 豊中市教育委員会『蛍池北遺跡現地説明会資料』1981年

(5) 大阪府教育委員会文化財保護課技師亀島重則氏の御教示による。

(6) 豊中市教育委員会『蛍ヶ池西遺跡』(『豊中市文化財調査報告第24集』1988年)

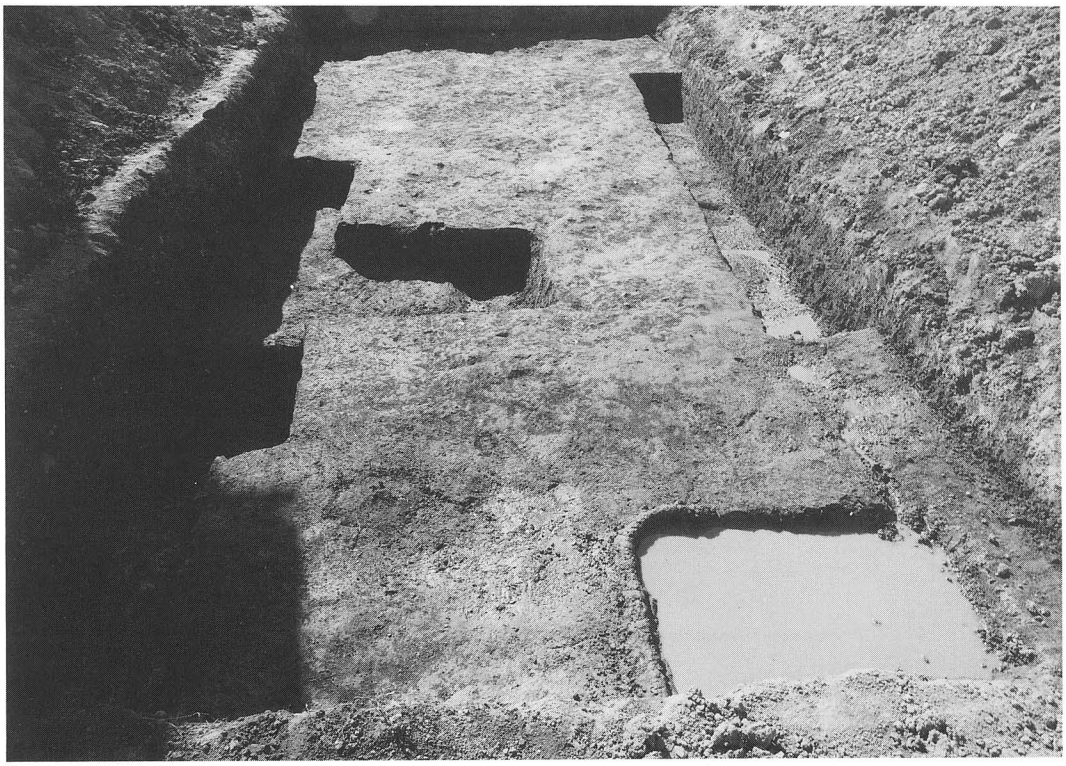
(7) 大阪大学『待兼山遺跡』1984年

(1)　調査地遠景（北から）



(2)　調査地全景（南から）

図版2　池田城跡88－3次



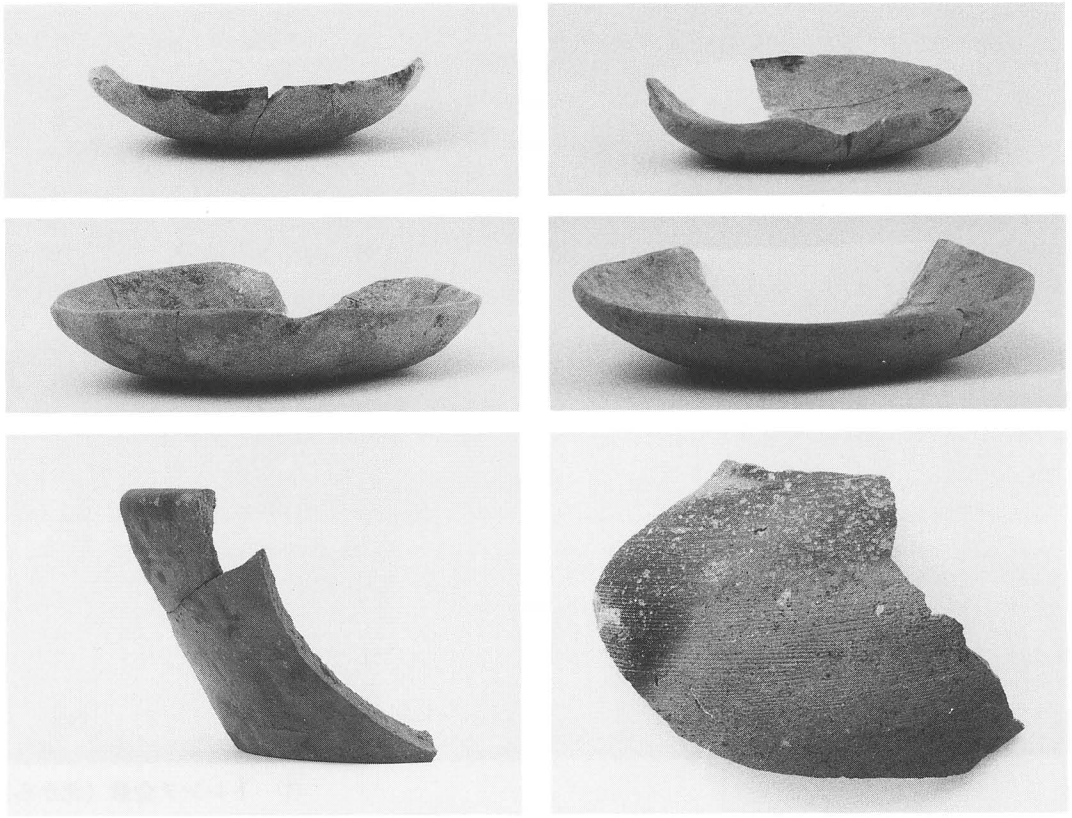
(1)　調査地全景（東から）

(2)　落込み検出状況

(1)　トレンチ全景（北から）

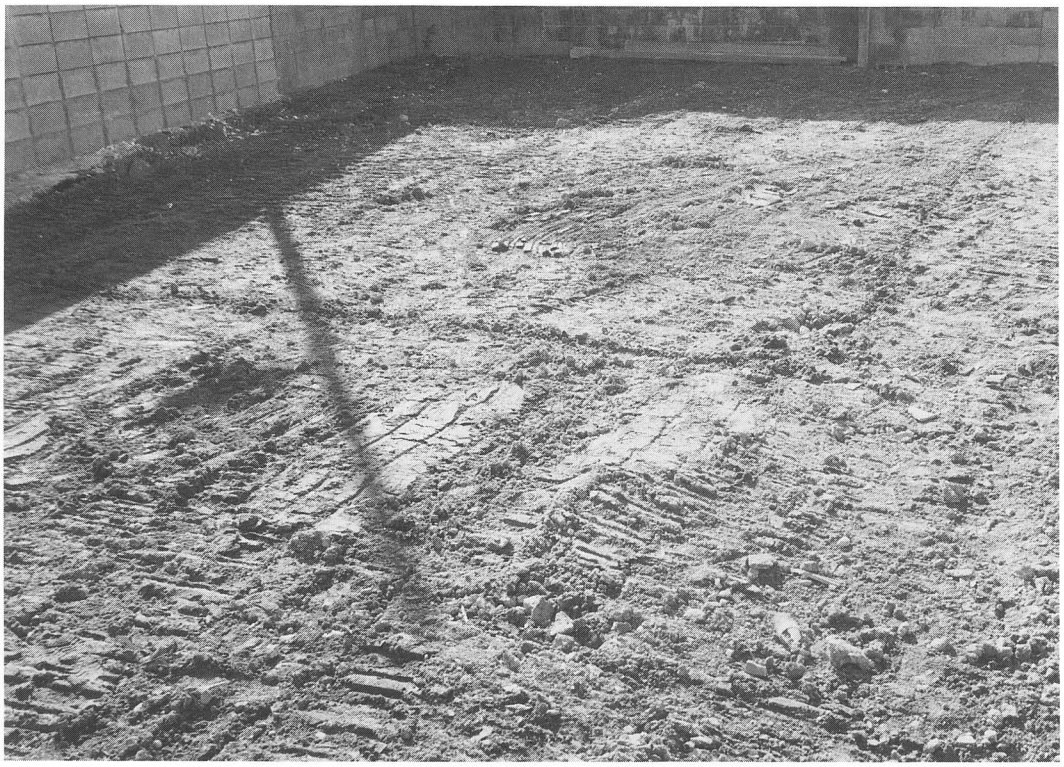
(2)　落込み検出状況

図版4　池田城跡88－2次・3次出土遺物

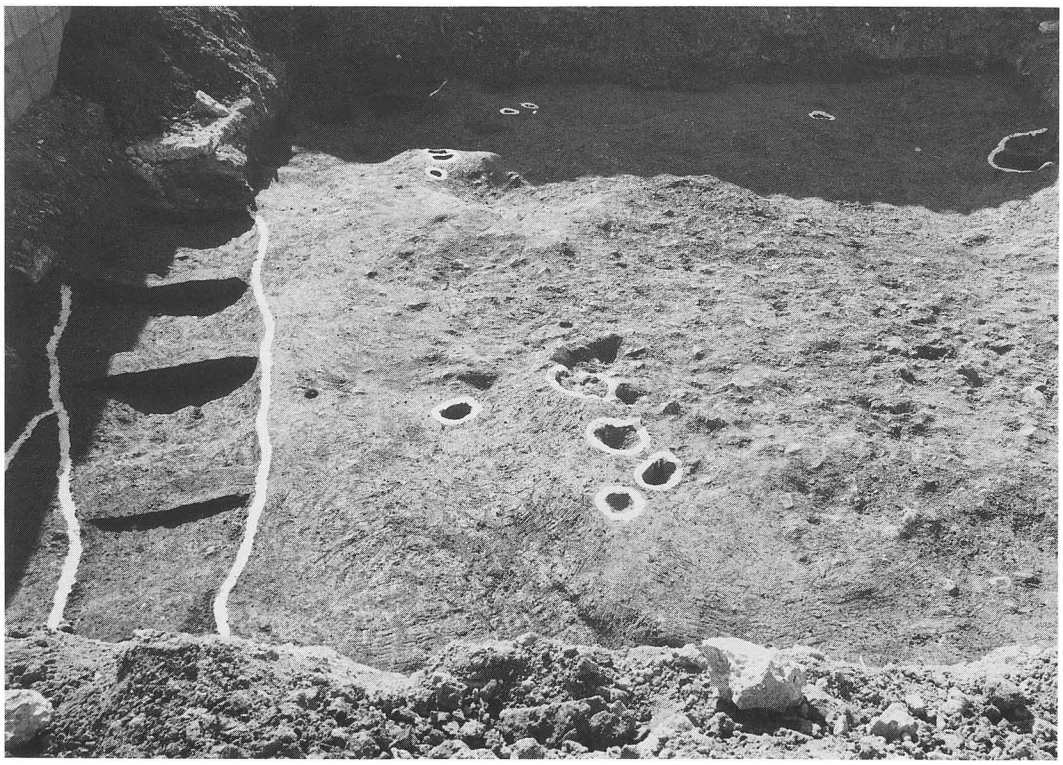


(1)　88－2次出土遺物

(2)　88－3次出土遺物

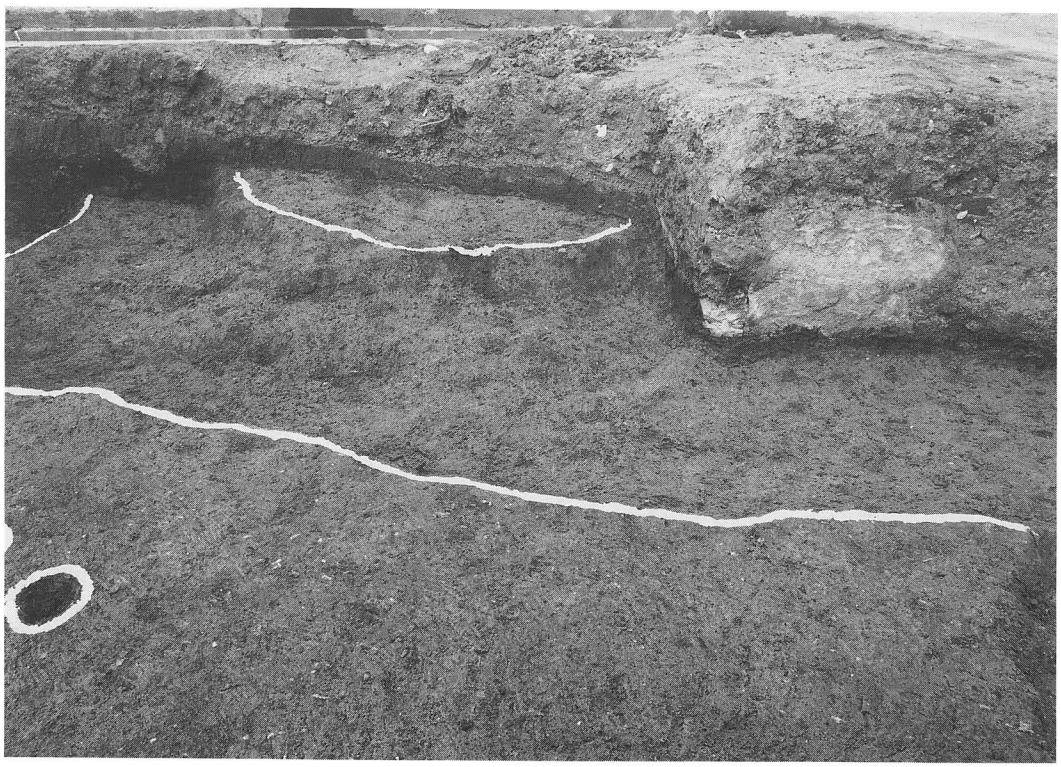


(1)　調査前の状況（西北から）



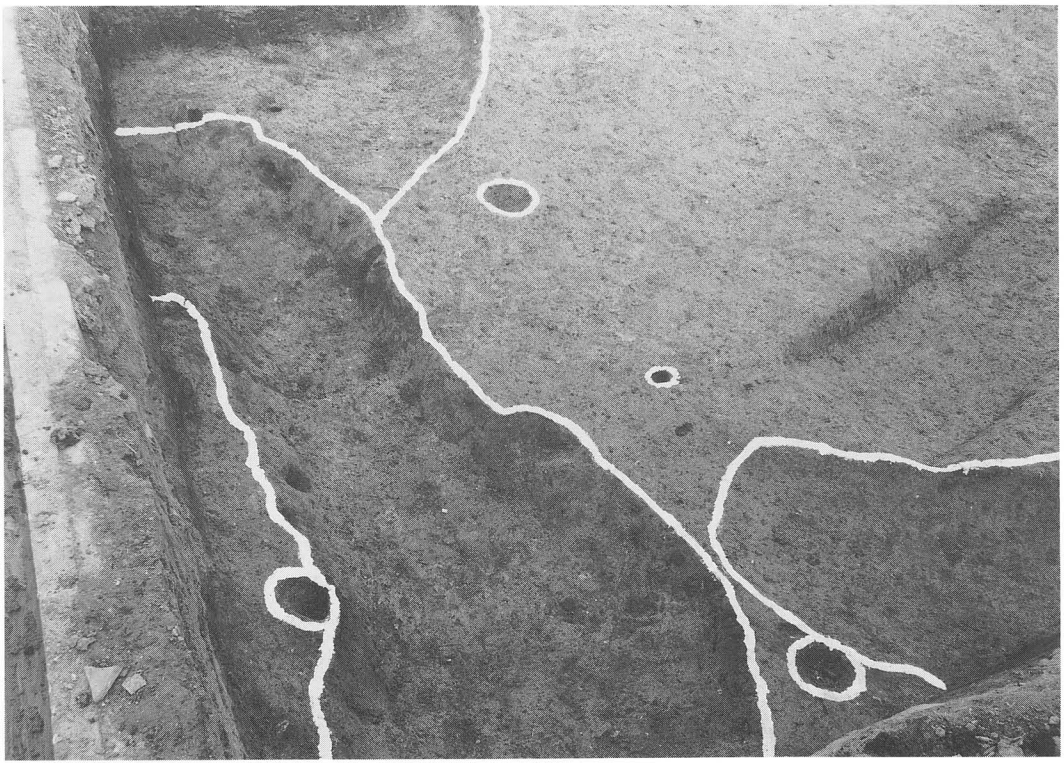
(2)　調査地全景（北から）

(1)　調査地全景（東北から）



(2)　SD－1検出状況

(1)　SD－2・3検出状況（北から）



(2)　SD－2検出状況（南から）

(1)　SD－2遺物出土状態（東から）

(2)　同上

(1)　SK－1土器出土状態（南から）

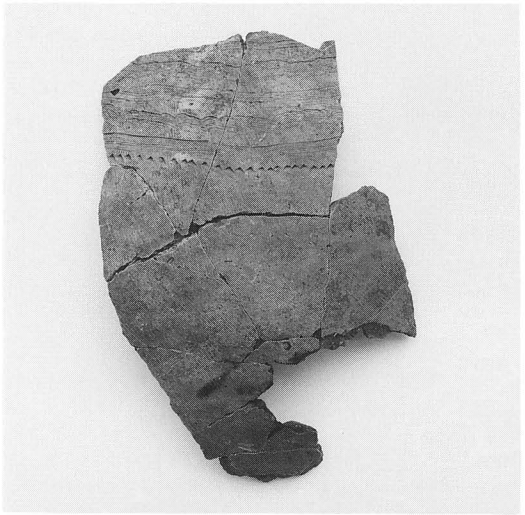
(2)　同上（西から）

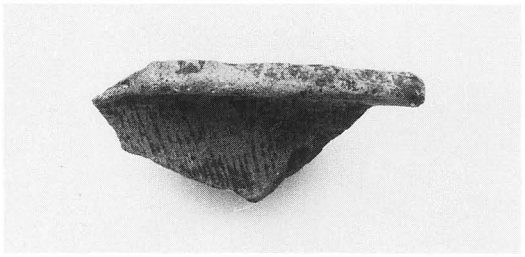
図版10　宮の前遺跡88－4次

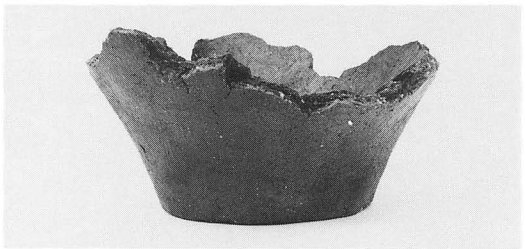
(1)　調査前の状況（東から）

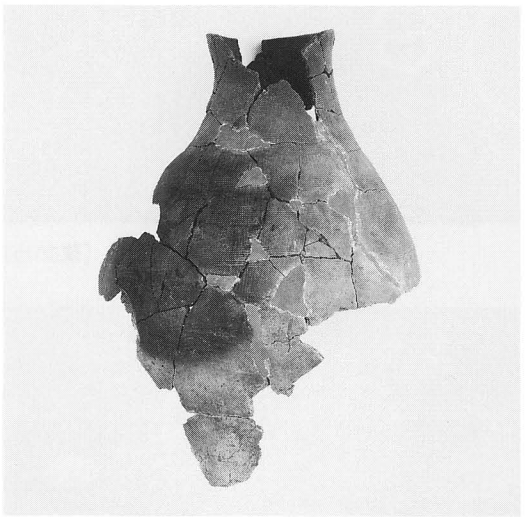
(2)　遺構検出状況（東から）

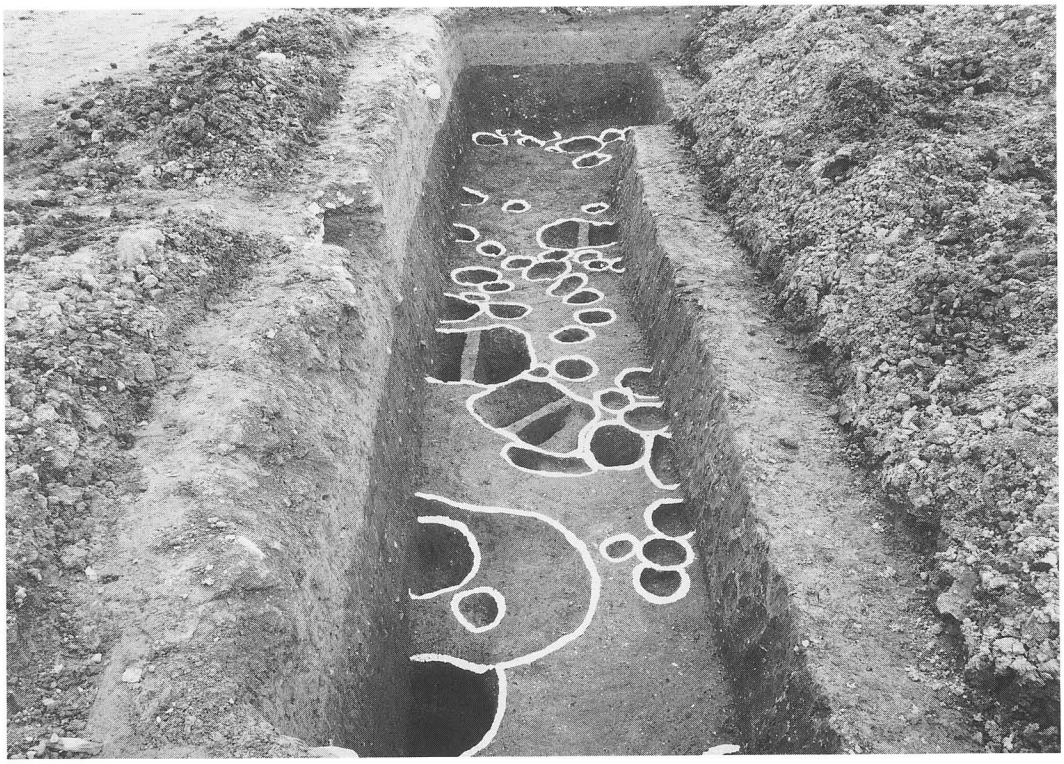
図版11　宮の前遺跡88－3次出土遺物



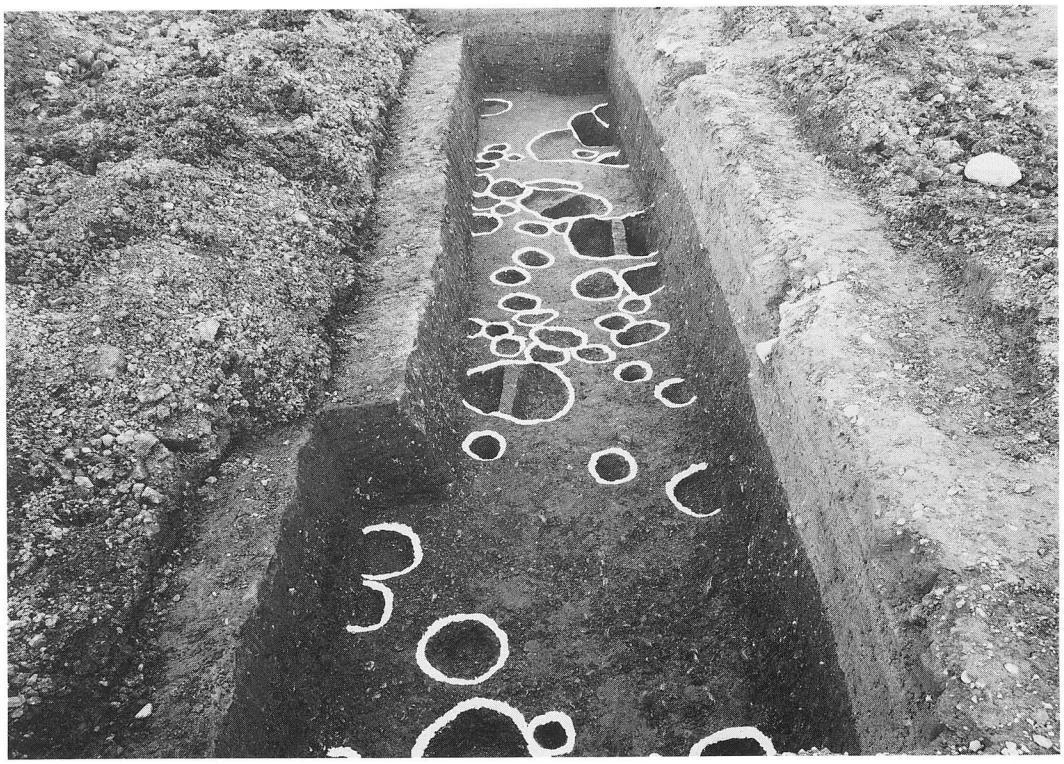








(1)　トレンチ全景（東から）



(2)　同上（西から）

池田市文化財調査報告第８集
池田市埋蔵文化財発掘調査概報

１９８９年３月
発行　池田市教育委員会
　　池田市城南１－１－１
編集　社会教育課　文化財係
印刷　西村印刷株式会社